

連れて戻り候へ、とことくしく御立腹なり。渡邊忠右衛門重綱（金指の遺はされ候へども、敵味方へひとめわかれかれ候ふ。大御所殊の外御怒りなされ、井伊直政兼金部少輔の御印本多内記忠助を御さしそへなされ遣はされ候ふ。直政・忠朝は中村の陣へ駆け入り、早々引き上げ申すべき旨申し渡し候ふとき、矢野助之進・林文大夫敵を追つ立て追つ立て戦ひ申候ふ。直政のり付け何とてみだるく仕り候ふ。早々引き上げ候へと下知いたされ候ふ。助之進・文大夫ふり返り、この所をば此の兩人に御任せ候へ。兵部殿・内記殿には有馬玄蕃手へ御下知候へと申し捨て切りかへり、遂に大方をきり崩し、夫れより敵味方入り交りせり合ひ候ふ。このとき治部少輔が兵水野庄次郎助の皮の羽織、銀の大釘の立物の兜にてのり來り、中村母衣のもの梅田大藏が手負ひて引き兼ね候ふを首をとり、大垣へのりかへり、三成開矢倉に居り候ふ下へ參り、水野庄次郎にて御座候ふ、高名仕り候ふ間御勘當御免下され候へと呼ばはり候ふ。治部少輔いかにも心得たり、高名も見届け候ふ間先手を頼み候ふ。早々參り引き取りくれ候へと申し候ふに付、又庄次郎は先手へ參り候ふ。この有馬玄蕃頭も田中兵部も、中村一學を助けて多勢にてかへり候ふゆゑ、秀家内稻葉助之丞（金指の遺はされ候ふ。直政のり付け何とてみだるく仕り候ふ。早々引き上げ候へと下知いたされ候ふ。助之進・文大夫ふり返り、この所をば此の兩人に御任せ候へ。兵部殿・内記殿には有馬玄蕃手へ御下知候へと申し捨て切りかへり、遂に大方をきり崩し、夫れより敵味方入り交りせり合ひ候ふ。このとき治部少輔が兵水野庄次郎助の皮の羽織、銀の大釘の立物の兜にてのり來り、中村母衣のもの梅田大藏が手負ひて引き兼ね候ふを首をとり、大垣へのりかへり、三成開矢倉に居り候ふ下へ參り、水野庄次郎にて御座候ふ、高名仕り候ふ間御勘當御免下され候へと呼ばはり候ふ。治部少輔いかにも心得たり、高名も見届け候ふ間先手を頼み候ふ。早々參り引き取りくれ候へと申し候ふに付、又庄次郎は先手へ參り候ふ。この有馬玄蕃頭も田中兵部も、中村一學を助けて多勢にてかへり候ふゆゑ、秀家内稻葉助之丞の治部が使替林半助乗り下り乗り下り殿仕り候ふ。明石掃部も堤を傳ひ乗り上、馬に輪をかけ殿仕り候ふ。一日村の敷の下にて中

村勢・有馬勢ひしと付く處にて、牧野傳藏が兵ども又備前勢少々踏み留まり候ふ。丹羽道監と石黒藤兵衛立ちこたへたり見事に候ふ。かくて日も暮れかへり井伊直政幣をとりて中村有馬が勢を引き上げられ候ふ。

「一説、中村が軍士等大垣勢に掛け留められ、未だ場の下に在りけるを、大御所本多中務大輔忠勝を召して、其の方急ぎ馳せ越え中村が手の者を引きめぐべしと仰せられ、忠勝頼て御前を退き、騎兵と足輕を相俱して株瀬川にいたり、中村が兵士を引きとらせ、忠勝は後殿して退きけるに、秀家・三成兩家の兵士多くひ留めんと勇みけれども、本多が繰引の列伍亂れざる故に、さすがひら付きにもえせず控へけるが、秀家の軍士稻葉助之丞（金指の遺はされ候ふ。直政のり付け何とてみだるく仕り候ふ。早々引き上げ候へと下知いたされ候ふ。助之進・文大夫ふり返り、この所をば此の兩人に御任せ候へ。兵部殿・内記殿には有馬玄蕃手へ御下知候へと申し捨て切りかへり、遂に大方をきり崩し、夫れより敵味方入り交りせり合ひ候ふ。このとき治部少輔が兵水野庄次郎助の皮の羽織、銀の大釘の立物の兜にてのり來り、中村母衣のもの梅田大藏が手負ひて引き兼ね候ふを首をとり、大垣へのりかへり、三成開矢倉に居り候ふ下へ參り、水野庄次郎にて御座候ふ、高名仕り候ふ間御勘當御免下され候へと呼ばはり候ふ。治部少輔いかにも心得たり、高名も見届け候ふ間先手を頼み候ふ。早々參り引き取りくれ候へと申し候ふに付、又庄次郎は先手へ參り候ふ。この有馬玄蕃頭も田中兵部も、中村一學を助けて多勢にてかへり候ふゆゑ、秀家内稻葉助之丞の治部が使替林半助乗り下り乗り下り殿仕り候ふ。明石掃部も堤を傳ひ乗り上、馬に輪をかけ殿仕り候ふ。一日村の敷の下にて中

此のとき、大御所は赤坂岡山の本陣より御見物なり。井伊直政人数の擧げ、中々足手をつかふ様の下知し引きとり候ふ。能き見物なりと人々申し候ふ。秀長・三成人数も漫々とたな引き大垣城へ引き入

れ、その勢の内に白しなへさしたる武者一騎のり下り見如に殿仕り候ふ。大御所白しなへ見如に候ふと度々仰はせられ候ふ。此のとき中村が方究竟の兵士三十六騎討死。殊に一學家老野一色頼母討死仕る。味方へ討ちとり申し候ふ首は有馬玄蕃頭内、稻次右近が討ち取り候ふ。横山監物主従二人の首計なり。此のとき右近は御本陣へ参り候ふを、大御所御覽なされ、鳥毛の半月は先刻この陣下を通り敵に向け候ひき。高名仕り候ふや。たれが者と御尋あり。有馬法印御側に居られ、同氏玄蕃家人と申し上ぐる。則ち首帳に付け申す。稻次申し候ふは我れより先に首一ツ持ち來りて候ふ仁有候ふやと云ふ。筆者申し候ふは中々堀尾信州の母衣のもの、首一ツ持ち來りて帳に付け候ふといふ。稻次承り夫れは我が家人を味方討に仕り候ふ。その御帳をけし候ひて下されと申す。則ち大御所御聞きなされ何事を申すやと御たづね被成候ふ。筆者承り右近が申し候ふ通りを申し上げ候へば、筒櫓の打ち交り軍には味方討にても高名になり候ふ。例もあれば、首帳消し申すまじくと仰せられ候ふ。このとき堀尾信州方へ聞え、母衣十走の兵ごも敵味方見分かず、うるたへもの母衣仲間には不罷成候ふ。そのまゝ御置可有候はば、帳をさし上げ候ふと訴訟仕り候ふ。堀尾帶刀吉晴き、尤もに候ふとて、かの者の腕を召し上げ、仲間をばづれ加増をなし、弓廿人預かり候ふよし。有馬玄蕃は稻次右近高名を感じ

本地五百石の上に六千石加増を遣はし、家老に致され候ふ。先年肥前島原にて、八十五歳にて討死仕り候ふ。

三〇 上杉浪人門田造酒之丞物語の事

上杉浪人門田造酒之丞は淺野采女正(彈正二男左京大夫弟)正則に奉公。かの門田が物がたりに曰はく、本條越前守重長は越後本條城主大剛一の大將、上杉にては一三を論ずる程の武勇なり。永祿十一年本條越前守逆心するにより、輝虎直に出馬なり。飼付川を阻てて本條も出で向ひ一戦あり。輝虎先手は上杉彌五郎義春、二の手は直江山城守兼續、三番は景勝十四歳、鐵上野介・栗林肥前守介ぞへなり。四番は謙信旗本なり。上杉彌五郎自身川へのり入れられし故、毛裏與十郎のり込む。一備一度にのり入れ候ふ。本條重長大敵も川へ打ち入れ、川中にて鎗を合はせ數刻たかひ候ふ所へ、三の備景勝手脇へ押し込み鎗を錫杖持して、勝つた勝つたと聲をかけ、二千ばかり眞黒になりて川上へ打ち入り、本條が前へ押し廻り候ふに付、本條重長敗軍なり。重長乗り下り乗り下り殿して退く所へ、上杉彌五郎乗り付け重長に組まんと志し申され候ふ。重長小高き所へ馬を乗り上げ扇をひらき、彌五郎

殿さすかにて見ごと候ふ。去りながら最早御引きとり候へ。深入めされ候ふは越度をとり玉ふべしと云ふ。彌五郎本條に組むことならずして引き返す。此の本條は大力にて大男、度々の軍功敷をしらす。國境なるゆる最上義光と取りあひ、庄内をすぎ半切りとり、天正六年謙信逝去のとき、景勝へ使を立て、上杉御家譜代の者にて候ふ。輝虎公ひころこそ御意に違ひ弓矢にまかりなり候ふ。上杉御家恨無之候ふ間歸参仕りたしとて景勝へしたがり、上杉三郎方を攻めしたがり、夫れより今に恙なく率公するなり。最上殿と千安にて本條戦のときに兜を切りわる。この刀正宗なり。後秀吉公御代に伏見御普請に付、本條重長在京し勝手つまり、かの刀を賣る。本阿彌とり次ぎ家康公へ被召上。本條正宗と云ふ。後紀伊大納言殿へ進ぜられけるなり。又甘糟備後守は上田住人にて、是れも小身より、武邊にて成立、謙信秘蔵の兵にて、後は大身に取り立てられ、景勝家にて本條重長と互角の兵なり。景勝會津へ参られ、白石城主として五萬石下され候ふ。福島城は本條重長、築川の城は須田大炊なり。關が原御陣なり、關が原御軍のとき、甘糟備後會津にしばらく罷り有り候ふあとにて、甥の登坂式部逆身し、政宗へ白石城をわたし候ふ。式部も政宗へ行き、夫れより景勝無興して、甘糟備後守を遠のけ言もかけず。備後守も日陰者の様になり罷り有り候ふ。家康は聞し召し及びたる、大剛名譽の兵な

る故に御望に思し召し、島山下總守義直に仰せ遣はす。景勝目見を悪ふ由早々立ち退き御旗本へまゝり候へ。二萬石にて召し出ださるべしと仰せ遣はされ、京にて下總地方へ、備後守を呼びて上意の趣を申しわたす。本多上野介正純書狀までみせ候へば、備後守頭を地に付け、景勝目見悪ふは拙者の不調法にて、少も恨御坐なく候ふ。たとへ何様に致され候ふとも、譜代の主に候ふ間御免下され候へ。上意は有りがたく存じ奉り候ふ旨涙を流し申し候ふ。その段上聞候へばその忠辭信の所にて、猶をしき兵なりと仰せられ候ふ。島山に選ひ候ふこと何として聞え、景勝愈々不興して、我れにかくれ、島山方へ行くこと言語道断とて、いよいよ甘糟はをしみ申され候ふ。備後守死去子共には跡式申し付けられず。津輕へ浪人仕るなり。右兩人の外に大剛のもの主大將分のもの多し。千坂對馬守これば上杉四家老の一つなり。見ことなる士にて、何方へ大事の使に越し候うても、一かど埒明くべき仁體なり。分別者なり。岩井備中守は、謙信小姓立にて見ことなる男、河邊度々あり。分別辯舌兼備はり、名高き兵にて殊に茶湯者なり。安田上野介は小男なり。手紙あるゆゑ少しく足を引き眼ざし光ありて、何者が見及びても剛の者といはぬ人なし。中々すいごく氣高き士なり。杉原常陸は武邊かさありて平人にあらず。分別了見大にして軍功敷度あり。糸くみのさしものをなます。直江山城

守は大男にて、百人にもすぐれたるもつたいにて、學問詩歌の達者才智武道兼ねたる兵なり。恐らくは天下の御仕置にかゝり候ふとも、あだむまじき仁體なり。島津下々齋是れは戦功武功肩を並ぶる人なし。其の外能き士多くありしかども、今ははやのこらす死に果てて、三代三代に及びたりと門田ものがたりなり。

三一 丹羽五郎左衛門物語の事

丹羽五郎左衛門長重の咄に、鶴野口にて我等も仕寄を付くる。景勝出でて我れらも仕寄を付け申すべし。先づ是れなる流に橋を丈夫に懸けてよと申し付け引き込む。直江を始め手ぬるき人かなと思ふ氣色にて橋もかけず。景勝また出で何とて橋はかけぬぞと被申。西條治部申すは只今にても、橋はかけ申すべしとて即時にかけ申し候ふ。景勝見て本の仕寄場をばさし置き脇に土俵をおき鐵砲をかけて貝次第に土俵をば持ち参れと下知せられ、大阪方始は心しげるが、この體を見て上杉は軍のすべなしらぬが、はかばかしくおらじとて引き入る。景勝衆も主の下知は受けぬ顔に、景勝は敵の油斷を見すまし、貝を吹き立つと即時に、本仕寄場へ土俵をひたひたと持ち寄り、仕寄を即時に付くる。前の

土俵置きたるは仕寄道になり。明日大阪方仕寄防出是を見て肝を消し興をさましける由。

三二 神原の家人黒田彦左衛門の事

神原の家人黒田彦左衛門といふ兵あり。大阪落城の時、五月七日赤母衣かけた敵を突きふせ、のり懸り首なとらんとつかまつり候ふな、傍輩の三枝勘兵衛のり付けて、彦左衛門その首は相討ぞと云ふ。彦左衛門はそれを聞きて首なも不取打ち捨てて、その身は懸提げ先へゆく。三枝これを見て又言葉なかけ、彦左衛門相討ぞ相討ぞと呼ばれども、懸提げぬふりに先へ通り、復敵を突き倒し能き首とり、初め捨てたるなは三枝打ちとり、捨て遠州は病死ゆゑ、前林へ久世三四郎、坂部三十郎を遣はされ、今度手柄高名の御吟味あり。三枝勘兵衛申し候ふは我れら取り候ふ首は黒田彦左衛門懸付けたる首にて候ふ。相討ぞと呼び候へども、そのまゝ捨てて通り候ふゆゑ、ひたと相打ぞと呼び候へども、聞き付け先へまゐり候ふ故、おとにて此の首を取り候ふといふ。三四郎・三十郎かの黒田なまひ、是れを聞けば中々不覺と答ふ。三枝は黒田に向うて、その方敵を懸付け候ふを見て相討と言葉なかくるに、その方は其の突伏せたる敵をすて先に通るに付き、跡より相討ぞと四五度呼びかけ候

見かへりもせず参り候ふに付き、是非なく彼の敵の首を取り候ふといふ。彦左衛門宿覺大候はすと坐を立ちさりぬ。この時兩御所様上聞に達し、御感涙からさりき。

三三 淺野左衛門家人永田治兵衛働の事

淺野左衛門家人永田治兵衛は病者にてかけはしること自由ならず。若者共内々はあの病者にては何の役にも立つべからずとわらふ。永田をこれ傳へ聞き人足は達者次第、侍は剛の者のみ役に立つ。無病又病者によるべからずといふ。惣井にて大阪方淡輪六郎兵衛を討ち取り、其の首をもぎ付けにして持参し、病者に劣りたる息災人と日來嘲りたる人をわらひかへしたりといふ。淡輪六郎兵衛墓石塔惣井にあり。甥の淡輪新兵衛立てたりと聞き、其の時の一番の吟味は、惣井一戦のとき龜田大隅守の手を殺してあとよりのく。上田主水は先へいいて惣井の町中のうちに隠れ居る。龜田をやり過してあとにて家より出て町中にてきたへ、大阪勢と鎧を合はせ一番鎧なり。龜田は河原の敵を追ひはらひ、町へかけ入り鎧を合はせると、淺野右近・土井大炊頭一咄候ふを聞きたる人物がたりけり。

三四 信玄豆州韭山とりつめ山縣同心辻彌兵衛働の事

信玄豆州韭山へとりつめ働働の時、韭山城の押へ山縣三郎兵衛をさしおき玉ふに、城中より備を出だし追合あり。その節山縣同心辻彌兵衛鎧下の高名じて、膝の口をのぶかに射られ、其の矢を不拔してとりたる首をもぎ來り、大將の山縣前に長まり居る。山縣大に叱つて、味方の引きとらざる前に戻りたるとて塙を追つ立てたり。

三五 三州吉田城迫合信玄廣瀬幸を得る事

三州吉田の城せり合に、山縣内、見科孕石はほれ者を討ち、廣瀬は人ば討たされども身衆へ付きけるが故に、信玄別じて廣瀬を召し、御喉輪をはうして富坐の引出ものに給はりけりとなり。

三六 攝州花熊城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事

池田勝入公攝州花熊城を攻めらるゝ時、森寺清右衛門八田八左衛門等が城の塙際へ付

いて居たるに、賊兵突いて出でて奇手崩れけるに、入田氏跡にのこり伏せて敵引き入らんとするを付
 けんと思ひ居るに、先の方へ森寺氏城堀の腕木にとり付きぶらさがりて鎧を持ち居たり。古老の兵の
 することなる故能きことならんと思ひ、森寺氏より五六間も後の方に、同じく腕木にぶらさがり居る
 に、賊兵敵を追ひはらひ城に入るとき、腕木にあるを不知して引き入るを、森寺氏腕木より飛び下り
 て、鎧を取つて敵を追つかけ、鎧を合はせ一番の功となれり。入田氏も同じく飛び下り、鎧取つて敵
 を追ひ廻し二番の功となれりけりとなり。

三七 輝政公武將の重寶を示さるる事

輝政公武將の重寶とすべきは、領分の百姓と譜代の士と、賜と三品なり。それを如何と云ふに、百
 姓は田畑を作りて我が上下の諸卒を養ふ。是れ一ツの重寶なり。譜代の士たとへ氣に不慮して扶持
 を放すといへども、敵國にて彼の者を實に扶持放したると不慮して、間にも入ると思ひて疑ふゆゑ
 に、敵國に逗留すること能はずして、終には我が國へ歸つて我が兵となるゆゑ、これ二ツの寶なり。
 又目に見ゆる相圖耳に聞ゆる相圖は、敵の耳目にかゝること故にたやすく敵國にてなしがたし。鶴鳴

は誰れもその相圖ぞと知らざるゆゑに、即ち敵國の鶴鳴にて一番鳥にて人衆を起し、二番鳥にて食し、
 三番鳥にて打ち立つたごとく相圖を定め、敵もその相圖を知らざるの儀あり。この三ツの重寶なり。
 是れを三の重寶と立てしと宣ふなり。

三八 家康公尾州小牧合戦御勝利の事

尾州小牧合戦家康公御勝利、尾に首實論。甲州の先方廣瀬郷左衛門は云はく、我が古主武田信玄大
 合戦勝利を得ては必ず引き上げ、よき場或は味方の城へとり入りて、二の目を討たれざるを第一とす
 と申し上ぐる。同國の士三科傳右衛門が曰はく違からず、去年六月江北・越前の境椿江城にて、佐久
 間盛政が中川清秀父子を討つてその城を振ふといへども、引き取り遅くして柳が瀬の賊軍、今一、いな
 りと言上。依之御入敷小牧山へ雲の如く上り給ふとなり。

三九 家康公同合戦御自讃の事

小牧山御本陣に御旗御馬じるし、或は張り立て或は隠し給ふ。上方の勢旗に心つかず。味方の人氣

敵に見せずして、長久手表へ悉く敵を釣り出し、敵に先手を捨てさせ、旗本を討ち破る御備へなり。此の合戦は公後々まで御自贖なり。

四〇 福島正則關ヶ原出陣日柄の事

福島正則關ヶ原の役に赴く時出陣の日、往亡日なり。或人諫むるに曰はく、占之趣出でて再無傷事と候へば、他の日に定められたといふ。正則聞いて實吉日なり。我れ此の度の戦功名第一と被言働を遂げ、大國に封ぜられて行くか、運盡きなば討死と思ひ極めたり。しかれば何ぞ再びこの地に歸らんや。日を替ふること有るべからずとて出陣せられしが、果して勳功拔群なるが故に勢・備兩州五十ニ萬石に封ぜられたり。

四一 同役吉村亦右衛門高名を失ふ事

同役正則尾越の渡を越えて秀信の兵を追ふ時、城兵一騎後れて引き行く所を、正則の士吉村亦右衛門馬を馳せて追之。己に追ひ付かんとせしが、幅二尺斗の溝にのりかゝりたり。吉村が馬曲あり。此

所にいたり狂ひ刎れ尻込して進まず。長尾平右衛門は遙々とより馳せ來りけるが、かの溝を躍りこしかの武者を討ちとれり。戰場にては曲馬は専ら選むべきことなるを、吉村心を用ゐること疎かゆゑあたら高名を失へり。

四二 同役岐阜落城の事

同役、岐阜落城の時、黒田肥前守長政・藤堂泉和守高虎・田中兵部大輔長胤・生駒雅樂頭吉正・幸山伊賀守等は城早く落ちし故、手に不都合を憤り、さらば大阪の城を責めんとて進み行く。この時石田三成・浮田秀家・島津義弘・小西行長その勢二萬斗、岐阜の落城せしことを不聞。後援の爲軍を發す。呂久郷戸の邊にて行き合ふ。田中先登して三成の兵を討つ。三成が先鋒敗れたり。義弘このとき三成へ軍使を遣はして、先陣小敗したれども、後陣猶戦にあまりたり。敵は勝を貪つて部曲亂れたり。此の虚にのりて横さまに突かば大利あらん。疾く兵を進められよと雖も、三成聽かずして、岐阜已に陥り候へば、是れを責めたる勢續き可來。今少し利有りとも畢竟の勝にあらず。巢穴をかたくむて變を見候はんと軍をかへす。このとき西黨大に敗して、郷戸・赤阪迄二里の間追討に逢ふ者おび

たゞし。義弘の言に従つて橋につかば、東霧の敗走必然たらん。惜しき圖を失へり。

四三 同役田中兵部大夫長胤の中間水練の事

同役、長胤郷戸を渡らんとする時、中間の中に水練をよくする者あり。是れをして瀬踏せしむ。大雨の後水増さりて淺瀬をしらず。諸人渡り兼ねける所へ、かの中間川へ飛び入り、或は浮み或は沈みて甚だ深しとみえけるが、歸つて淺く候ふといふ。長胤先に汝が渡りし體は深かりし體なるが、今淺しと云ふは如何と尋ねられければ、かの者答へて淺き體を見候はゞ、他の備より先を争ひ渡り候はんとわざと深き體を仕り候ふといふ。長胤則ち淺き通りを渡りて先登の功あり。かの中間は此の功により郷戸三郎左衛門と號し、士の列に入れられけるが、後に細川家につかへて病死せり。

四四 同役石田三成浮田秀家が諫を用ゐざる事

同役、源君赤阪に御着陣あり。浮田秀家勢州より大垣の城に來り、三成に對し今日東國より上りたる諸軍の陣營を見るに、營法不嚴軍令不整、淺間なる體なり。かれが敗形に乘じ、今夜軍を發し營

を破らば必ず利あらん。これ彼れが銳氣を奪ひ、味方の勇を益すの謀ならんと勸めけれども、三成不果して止みぬ。能き圖をばつし利を見て取らず數度なり。

四五 同御合戦毛利秀元戰場にて東方へ返る事

同役十五日の未明赤阪の總勢關ヶ原へ打出で、辰上刻内府公野上村西海道の南桃栗原と云ふ山に御旗を立てらる。御旗本組段々の御備、關が原町東の端迄十二里程あり。御先は則ち福島左衛門大夫同刑部小輔・京極侍從・藤堂左渡守・有馬玄蕃頭・山内對馬守・田中兵部少輔・二番備前田甲斐守・竹中丹後守・三番備下野守忠吉卿・井伊兵部少輔・本多中務大輔・酒井左衛門、公御馬先は御小姓組段々の備、五の字の御使番、五色の御母衣組、御馬じるし、金銀の半月切りさき、金の扇子は大久保彦左衛門御馬の先に進みたり。今日未明小雨降り霧ふかく、物色見えがたし。漸う巳の刻初に天明れたり。時に御旗本より武者三騎のり出だし、敵みかた備の虚實考へのり戻る。これ則ち曾部江法齋・森勘解由なり。石田三成陣と公の御旗本と、その間三十五町に、敵方東軍の旗先を見かけて、則ち藤小川を打ちこし

小關村の西巽（西に風吹く）に向つて段々に備へしも、備前中納言・大谷刑部小輔・平塚因幡守・戸田武藏守・同内記等は山中峠に人数を立てしが、引き下し谷川を打ちこえ、關が原の北の方へ押し出だし、西の山を後にして足輕をかけ、鐵砲を打ち立て矢を發す。この手にあたる東方福島左衛門大夫・同刑部小輔・藤堂佐渡守・黒田甲斐守・京極侍從、北の山より押し下し、靜にかゝり合戦身方ひしと取りむすぶ。地煙を立て攻めたかふ。さる程に宇喜田秀家無二の西方太閤の御ときより御大老のその一人、今日の長將なれば、八千の人数、五千先手、三千旗本にして、福島先手へ平がかりにかゝり、面をふらず突き立て追ひ崩し、二の手より秀家采配をふり正則ともに討ち入り、天下の面目に備へよと息をもつがず突きかゝるときに、正則下り立ち芝居におりしき、槍を持ちかへせものごも、敵は前後一ツに成りたり。みかた殿つべき圖こゝなり。正則こゝにありと下知し給へば、福島勢守りかへすと見る内に、惣返しとかへし勇みかゝる。宇喜多勢を旗本ともに追ひくづす。このとき秀家千の備なりとも、二の味方に用ゐる給はゞ勝つ軍なるべしと云へり。この戦ひ半に、名島秀秋そなへより大谷刑部備へつさかゝる。則ち吉隆馬上に自害す。毛利秀元戦場にて東方へ返す。此の色を見て諸手の敵崩れ色付ききと云へり。

四六 同御合戦終り御詮議の事

同役に、家康公御合戦畢り御詮議。石田が陣場に池村柵より東にて討ちとる首は、高名その品輕重あり。柵を四へのりこえて捕る首は追首なり。南宮山の敵は追手の敗北を聞きてのこちす退散なり。

四七 同翌十六日江州佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事

同役、翌十六日江州佐和山へ向はるべしと、五字の衆諸子仰せ渡さる處に、申の下刻より大雨、この時山中村御本陣大雨に付、惣軍小屋々々支度の火を焼くことを得ず。御旗本より惣勢へ生米喰ふべからず。少の内水に米を浸して喰ふべしとなり。不破・關川の洪水に、敵味方の死骸流るゝこと夥し。

四八 同牧方表に御旗を立てられ首御實檢の事

同役、家康公牧方表に御旗を立てられ、今度討ちとり來る敵の首御實檢あり。公甲冑を召し拔身の御長刀を持たせられ、牧方前野御牀几に御腰をかけられ、御張肘にて大阪の方に向はせられ、御前に

御旗七本金の扇子の御馬じろし、御鐵砲百挺火繩に火付け、御弓百張矢をばげ、御槍百本拔身、御右に非伊・本多・大久保・酒井・榊原御譜代の諸將伺候、少し上りて秀忠公初め奉り御一門方、御左は池田三左衛門・福島左衛門大夫、その外今度忠節の大小名毛氈をしき張肘にて伺候す。外様の大名は馬じろし立てし所に、具足櫃を引き付け引き付け伺候す。扱て諸の首曲物に入れ上を絹にて包み、その絹ばかり取つて、曲物の蓋を明けて首を出ださる。その次に桶に入れたる首六ツ七ツおく。其の外誰れ誰れの手へ討ちとると鼻をかき並べたり。然るときに公さて首實檢あるべきやと池田藤島兩將へ上意。御受には御時宜しく御座なさせられ候旨申し上ぐる。其の時立ち上り給ひ、長刀を御杖に御つきにて、御張肘にて左の御脇を御眼じりにて上覽。その時前後左右大小名一同に頭を地に付け給ふ。各々頭を上げて張肘にて伺候。御足指子を左より御ふみさて右を御ふみ、又左にて御踏納なさせらる。藤波を曳曳々々と長く御あげ、諸軍一同におしと聲を上げ奉る。さて御長刀を御脇よりそと受取り奉り、秀忠公へ渡し進上仕る。秀忠公踏んで御頂戴あり。そののち御長刀持人に御渡し、さて御盡ありきとぞ。

四九 備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事

備前少將光政の士上泉治部左衛門義郷は、上泉主水が甥にて大阪兩度の役にも武功あり。老年の頃池田信濃守政言、光政の士上泉に具足箱に利方よき制法有りや、聞き置きて家中の士にも言ひ聞かせんと尋ねられければ、上泉答へて、笈にも仕指にも仕り候ふが、有り来る鎧篋を用ゐんは、いか様にも害なく候ふ。關が原・大阪兩度の役天下諸軍馳せ集まり候ふに、種々の品有りて是れぞ利有りと申すことは承はらず候ふ、重き害有つて輕きに利あり候へども、これ共に軍行は定法有りて、左のみ遠路を押すことなければ、必ず憂とするに足らず、笈は山林繁茂の地に利ありと申し候へど、具足箱さへ持ち行くに不自由なる地へ、大人敷を押し入れて何の益有るべきや。只有るにまかせて用ゐよとせめされ然るべく覺え候ふとなり。

五〇 瀧川左近將監一益極暑に馬上にて川を涉るとき水を飼ふ事

瀧川左近將監一益、武藏野合戦に手負ひて退口に、極暑の頃なれば、馬甚た疲れて遍身汗にひたれ

川の川を乗り渡すとき水を飼ふものあり、水を不飼ものあり。水を飼ふもの、馬は十町ばかりにて皆行き付れたれども、飼はざるもの、馬は別狀なかりきとなり。

拾遺卷の三

五一 相圖の旗といふ事

相圖の旗といふことあり。甲陽家に於ては萩原常陸守と云ふ大剛の武士、伊勢浦の獵をなすに山上に於て相圖をなし、その相圖に依つて魚を捕るを見て、是れに依つて工夫をなして、相圖の證據旗と云ふことをなせり。則ち信虎の世に、駿河今川の家臣福島といふ武功の者、甲州を取つて我が國にせんとして、駿遠の人数大軍を以て甲州へ押し入り、已に武田滅亡せんとせし時、常陸守伴の證據旗の相圖を以て軍に勝ち、敵の大將福島をも討ち取りたりとなり。是れ小旗に依つて大利を得たりとなり。

五二 武田信玄相圖の旗を用ゐる事

武田信玄新田・足利へ燒討し給ふとき、敵城の高み高みに旗を置きて、敵の出づる田でさるる。その旗の相圖によつて知り、その虚實をはかつて敵の宿城を燒討し給ひしとなり。

五三 保科彈正信州高遠に籠城の事

信州高遠の城に保科彈正廿七騎にて籠城のとき、小笠原一萬の人数を以てこれをせむ。このとき彈正郷民を大勢かりて見せ勢となし、それに旗を多くもたせて見せ旗となし、又山上に相圖の旗を置き、敵の押し來るとき半途にして相圖の旗を振つて、石弓を以て敵の人数をしきりて、終に廿七騎を以て勝利を得たり。

五四 上杉景勝最上義元と合戦の事

上杉景勝最上義元と合戦。直江兼続長谷堂口を引き拂ふ。溝口左馬助勝路直江に向つて日はく、夜に入りて人数引き取り候はゞ大敗軍に成るべく候ふ。今夜は堅固の地に陣取り、明朝引き取り給へと申しければ、直江も最も同じ、一里計引き取りて小高き所の野山左り半道計り行く。先は大山愛こそ能き所なれとて陣を取り、夜の明るるを待ち謙信家の軍法懸かり引といふてだてにて引き取りしかば、上杉の諸軍無恙米澤へ引き取りける。この時の陣取直江下知にて、山より半道前に陣取りつゝ、

山へかゝらざることを、家康公後々まで御稱美ありけりとかや。

五五 美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鐵砲迫合の事

美濃大垣にて、八月廿四日より九月四日まで鐵砲迫合有りけるに、輝政公と四國方との迫合の間に數ありて、それへ便りて敵より鐵砲を放しかくるゆゑに、此の敵の敵を追ひはらひ、此方へ取つて竹を切り拂ひ、まはりなき様にすること可なりとて、山脇源大夫・竹村伊豆・八田豊後、この三人の番頭に仰せ付けられ、三人ともに組鐵砲を連れて出張し、敵を追ひ拂ひ敵を切りはらひて、三備ともに引き退かんとするとき、敵喚ひ留めたるとき八田氏殿後にて、追ひかくる敵を追ひ拂はむと、足輕に鐵砲を打たするに、急なる場ゆゑしかじが打ちがたし。このとき豊後長臣柏原空右衛門足輕の中になしかなるもの三人をまねき、鐵砲に玉薬をつがせ追ひ來り、敵中へ空右衛門とりかへしとりかへし十四五程鐵砲を放し、馬止の敵三人程にあり、それにて辟易して敵引き退きたりとなり。柏原も引き退くときに、右の玉薬を込めたる足輕の居處を見るに、砂の中をほりて、その中に居て玉薬を込めたりとなり。穴をほりたる體を柏原は不見急なる時によく掘りてはいりて玉薬を込めたることを笑ひたり。

となり。柏原は柏原市右衛門の先祖なり。輝政公より播磨の御普請場にて、御褒美に、緞子の羽織を被下となり。その謂れは天下普請のとき、黒田殿の衆と口論し、齒を少しならねながら相手を切りたふし、利を得て金銀を以て入齒をしたるとなり。此のことを仰せ出だされ、かの入齒の者がと有りて御はうび被下となり。

五六 甲州山縣同心長坂重左衛門の事

甲州山縣同心の十長坂重左衛門、後に伊井家に仕へたるとき、上泉義郷と武話ありしに、重左衛門が曰はく、惣じて戰場にて互ひに銃將先に進んで、利ある戦地を取らんと欲するとき、我が方に其の地利の場をとりたるときは、其の場をとるや否や、銃卒に「放つ」まはひをとりて玉鉛を放すべし。不然ときはたとへ能き場をとりて勝を得たりといへども、銃將の功を先賞することなし。其の場をとりたるまでなり。その場をこの方へ取るやいなや鉛子を放すときは、銃將の功いちじるし。此の體を可考知ことなり。

五七 信玄小田原發向の時根來法師一番鎗の事

信玄小田原發向のとき、小田原の蓮池に於て、とひ大貳と云ふ根來法師の第一番鎗に、さしつゝいき進んで旗本衆の二番やりはいやなりと云うて捨てて刀をぬきて敵へ切りかきり、首をとりたりと云ふこと是れ向ふ渡りなり。

五八 輝政公岐阜攻貝吹右衛門が事

輝政公關原合戦の前岐阜の城攻のとき、合度の川向に岐阜勢出でて、此方よりわたるを待ちかけたるに、池田の御人數敵を見て進みかきり切り崩さんといさみけるを、輝政公兵機をたくましくせんため、押へてかいらせたまはず、見つくるはせたまふに、御貝吹貝吹右衛門武功ありける者にて、最早進み貝を吹き然る可しと申し上げ、合度の川へ三里だけふみこみ、貝を水にて通しかり貝を大貝にて吹き立つると、池田の諸軍一同に川をわたりて其の勢にて御勝利なり。貝吹右衛門は武藤伊勢右衛門先祖なり。貝吹右衛門・中村勘齋門前など高藤の貝役なり。輝政公右御合戦以後、毎年元朝

に表へ御出ありて、始めて御言をかけらるゝは貝吹右衛門なり。表へ御出てふくみも人目出度と、吹衛門へ御言かけらるゝ時、吹右衛門五百八十年御目出たぐさりますると、御返答申し上ぐるご御吉例なり。右の合度の合戦のときに吹きたる大貝は、大概長さ一尺五六寸ばかりもありて、息よわきもの吹かるゝ貝にあらず。一ほいを吹きたる福田市大夫若盛のときまでなり。右の御合戦勝利以後關が原御一戰東照宮御利運にて、輝政公段々數國を封ぜられ、播磨・備前・淡路三ヶ國の太守となり、百萬石の俸祿を得玉ふ。ゆゑにこの大貝を指して、三ヶ國百萬石を吹き出だしたる御貝とて寶器となりたるものなり。

五九 朝鮮陣の時兵器を塗り馬糞にて乾かせし事

朝鮮陣のとき甲冑兵器損じ、諸軍難儀なりしに、後々は銻々漆を以て葺補せしとなり。漆にて塗れても、風呂なきゆゑに乾かすことなりがたく難儀せしに、作意なる人ありて、塗物を置きたる廻りに馬糞を集め置きたれば、一夜宛に干きたりとなり。

六〇 松永彈正久秀が馬の事

馬は人氣あるやほめとりあしき氣つき馬ならでは、戰場長陣はこたへがたし。いかやうに氣つよく悪相ある馬も、長陣にてはれこの如くなるとなり。松永彈正久秀の乗りたる馬を、八田豊後求めて大阪陣のころ乗りたるに、人氣ありてはめがたきを、吉介といふ異相の馬取ありて轡を持ちてかゝると、前足をあげて喚はんと口を明けてかゝるとき、轡をはませて牽きいだしとなり。此の馬大阪陣以後この馬を駿州の島田へ買駄馬となりたるに、其の以後四五年も小荷駄にて荷を付けて、若馬の如くもありきとなり。これ氣性つよき馬なるゆゑ此くの如くこたへたるとなり。八田正久大阪陣のとき、十八歳なりしに、兄久次若きものなるゆゑ、下部なれども度々戰場に出で事に逢ひたるものなりとて、右の馬取の吉介を正久の馬取となし付けられたるに、大阪夏陣落城のとき、崩口に兜付の首をとられたるに、敵を鎗付け突き伏せ、首を取られたるに、吉介云はくはやく敵の刀をとり玉へ。不然ときはその敵の分意知れがたと云うて、正久は同心に無之を右の敵の刀を取りたりとなり。件の刀高田の刃にて朱鞘なりきとなり。初鎗合のとき正久の鎗の太刀打を、敵刀を以て切り拂ひたるとき刃をれた

るや、またはその初より折れたるにや、右の分捕の刀の太刀打の處、大豆粒ほご刃をれたりとなり。兜は小田原盛の金さびにて、終に見能き盛なりといへり。然れども池田利隆の子にて兜付の首三つならで無之。ゆゑに兜を付けて御旗本へ還はせしゆゑ、八田家にこれなしとなり。

六一 輝政公關ヶ原行軍順見の事

行軍のとき大將諸軍を巡り見玉ふこと古法なり。關ヶ原合戦の行軍の時、池田輝政公諸卒の左の方をばたばたと乗り出だし、先手まで乗り行きて、先手の先にて馬を右の方へ折り、諸卒の右の方を地道に乗りて、後陣まで順見ありたるなり。戻りに地道をのりたまふことは、先手迄のり行き玉ふときは諸卒前へゆく、ゆゑに早道にのらざるときは乗りぬけがたし。先手の先までのりわけ、右の方へ折りて押し行く。諸卒の右の方へ乗りて戻り玉ふときは、地道にて靜かにのり戻り給ふといへども、諸卒は先へゆくゆゑに、後陣まで地道にても間をとらずして悉く順見なり。やすきを以てなり。

六二 大河を渉る心得の事

大河をわたるときは馬武者を川上を渡させ、川をきらせて川下を歩卒わたるときは、大勢のいきほひにて、馬筏にてわたるゆゑに危きことなし。武藏守利隆公諸卒天満川をわたすとき、右の如く川上を馬武者を一同にごつと川へ乗り込んでわたし、その川下を歩卒わたりしに、何の苦惱もなく、悉く渡せりとなり。大勢の中只一騎しづみて、さし物上へ浮きてひらひらせしかども、急なる場ゆゑ引き上ぐる人なく水に没し死にたり。右の一騎溺れ死せしより、外に末々まで一人も水に没したるものなしとなり。

六三 大阪陣の時利隆武者奉行の事

大阪陣のとき利隆公そなへの武者奉行、須賀伊豆・舟戸帶刀兩人なり。武者奉行は我が組の士卒ならで成りがたし。番頭の隠居などの如く、人の重んじて年老なる武功ある人を用ゐるべきとなり。

六四 同役池田の諸士類當なき事

大阪の役に、池田の諸士類當をかけたるもの一人もなし。上使の城和泉一人類當かけたるなり。

然れども齒なき老士などは頗當なかけざるときは、忍の緒をしむるときは口すくみて、物言ひあしきゆゑにかくることよしとなり。

六五 兜の頭心得の事

兜の頭一ぱいにつまりたるはあしし。鉛子あたりたるときも、ひびきつよく氣も鬱してあしく、また大阪冬陣のあつかひのとき、井伊家の物頭井樫へあがり遠見せしに、鉛子來りて兜にあたり、卒に仆れたるに、引きおこし兜をぬがせたるにぬげず、やうやうぬげたりといへども疵見えす。いろいろ尋ねたる處額の米かみの所にあたり、玉半分ほどだけ兜へこみたり。これ兜つまりたるゆゑなり。終にその疵にて死したりとなり。

六六 上杉謙信馬印の事

上杉謙信の馬じるし大根の折りかけとは、赤根地折掛旗に大根を白くのこしたるものなりとなり。

六七 大阪夏陣井伊家の士小笠原傳兵衛手柄の事

大阪夏陣五月七日天王寺口へ、秀頼のひやうたんの御馬驗、出でかゝりたるとき、關東方に秀頼の御馬驗、眞田左衛門佐先手にて、切りかゝるといふ風説あるといふや、關東方の惣軍なほのわからなく崩れたる、諸手悉く崩れたるが追ふともなく大敗軍となり。井伊家士小笠原傳兵衛、嫡子と若黨と以上三人にて、直孝の赤根の四半に金の井の字の馬印を捨てて、北げたるを取て押し立てたるを見て、總軍ともにやれ掃部頭股の人勢が返しにるはと言つて銘々にとりて返し、しづまりて終に御勝利となりたるなり。小笠原後に加増にて取り立てられたるとなり。右の敗軍のとき、銘々にやれ返せ返せと云ひながら北げたるなり。何のわからなく北げたるに、何ともすべきやうなきものなりと義郷の咄なり。右の馬印を立つるを見て惣軍かへしたるを見て、破軍屋の尾返が合ひたると云ひたるとなり。この敗軍のとき、兩御所様の御旗本大崩れにて、家康公も度々御腹をめされんとありたるを、御近習大久保彦左衛門なごとめられたるとなり。後々まで家康公御武功の御物語あるときは、此の御敗軍のとき日に御腹めされむとあるを度々御いさめ申して、御腹めされず。終に天下の御主とな

し奉ると大久保申されたるとなり。

六八 信玄嫡子義信と不和の事

信玄嫡子義信と不和のおこり、川中島合戦のとき、義信は旗本組の右備なり。然るに夜半に謙信犀川をこえて近々と備へ、無二の合戦を持つてかいられたるを見て、旗本備へ、義信をやり、信玄は義信の備へ處旗本組の右備に居られたるに、謙信信玄の旗本備義信を切り崩し、義信も數ヶ所手を負はれ、こゝに信玄居られざるゆゑ、信玄の居られたる右備へ切つてかゝり、信玄の床机に居られたるを太刀にて切られたるを、信玄圍にて受けられ、側より中間頭原大隅鎗にてつきたるにつきはづし、謙信の馬の三頭をつき、馬走り出で退れたるゆゑ、討ちはづしたるとなり。此の合戦以後義信は強敵の謙信無二の戦を持たれたるゆゑ、旗本備に居てはその身の危きを以て、常々不和なる義信を旗本に備へ、床机をかへて捨殺しにせんとの工なると思はれ、父信玄をうらみ終に飯富兵部がすゝめによつて、反逆有りて信玄怒り、義信を切腹せしめられたりと、上泉義郷の咄なりとなり。其の證據には甲陽軍鑑に、この合戦に信玄の旗本備崩れ、信玄は何所に御坐なさるやら不知、混亂したる所へ、謙信太刀

をぬき持ちて謙信の床机に居られたるを切られ、信玄圍扇をもつて受けられたるとあるは、信玄と義信と床机をかへられたる證據みえたり。法令嚴なる信玄旗本の備において、御坐所しれざると云ふ程のことあるまじきなり。

六九 大阪にて石川宗左衛門江坂清次郎組討の事

大阪にて日本の諸士入り交りて戦はれたれども、組打はまれなり。井伊家の土石川宗左衛門・江坂清次郎兩人組打せり。其の首尾は城兵突いて出でたるとき、城兵と石川と鎧を合はせたるに、相手の敵兵もやりにて仕合ひたるに、いかゞしたりけん、たがひに入りくみ鎧をすて、太刀になり、敵石川が太刀を持ちたる、掌をきり付け、無名指・小指を切りおとせり。ゆゑに太刀を捨て、手と手ととり合ひ組み合ひたるに、敵は瘦弱の男、石川は大兵にて腕先もありけるゆゑに、敵組み伏せられたれども、初に太刀にて右の無名指と小指を切られたるゆゑに、首を取るべきやうなし。我が方を見れば味方の兵江坂清次郎つゞきてひかへたるゆゑ、言かけて是の首とり候へといへば、江坂は十七歳の若武者なるが他人の組み伏せたる敵の首を、我等は取ることさらひなりと答へたる時、石川右の手を見せて知

此指を切られたるゆゑ、首を揚げたしと云ひたるを聞きて、其のまゝ敵の首を揚げたるとなり。井伊氏の本陣へ右の首を持参したるに、江坂は元來石川が組み伏せたる首を揚げたるゆゑに、申を我が功にあらずと有りのまゝを云ひたるゆゑに、兩人とも御感にて、同列に加増ありたるとなり。

六〇 藤堂の土田中權右衛門組討の事

又藤堂氏の家士田中權右衛門弓を持ち敵と出あひたるに、ひたと矢撃をかけて矢を放したるに、或敵急に進み來り十字の鎗にて突きかゝり、田中が矢をひきはりたる弓を鎌にて突き切りたるゆゑに弓を捨て、敵と組み合ひ、敵を組み伏せて首を取りたるとなり。凡て大阪陣のとき、諸軍の中にて組打は、井伊家の石川・江坂と藤堂家の田中、此の三士の兩くみ打迄なりとなり。

七一 大阪冬陣上泉義郷指物の事

大阪冬陣のとき、井伊家の諸士眞田出丸の堀下につきたるとき、堀際の櫓をくゞりて堀際へ付きたるに、櫓をくゞるとき、さし砂邪覺になりたるゆゑ、これをぬき鎗に持ちこめて櫓を通りしに、上泉

義郷は指物をがつたりまで、紫草にて結び付けたるに、とけぬとてよほごためらへたるとき、日頃心易く出入して目をかけたる足輕の小頭、義郷のあとにうゞいで櫓にのぞみたるに、義郷のさしもの留めのくゞりつけられたるを見て、義郷の傍により、治部左衛門様此の場へさしつゝきたるぞと云うて、件指物の留の緒をときたるゆゑ、指しものをぬきて鎗にもちこへ、櫓をくゞりて堀下へ着たるとなり。是れ義郷指しもの留をせられたる證據なり。その餘の諸士はさしもの留をせざるに、早速にぬきて櫓をくゞりたるとなり。右の足輕小頭右の場所へ出て、義郷のさしもの留の解けるなると云ふたは、其の場へつきたる證據として、大阪の役終はり治平になりたるとき、彼州へ三百石にて身上濟みたるとなり。

七二 東照宮と越前少將忠直卿御不和の起原の事

上泉義郷曰はく越前少將忠直卿一伯東照宮と不和の起原は、大阪にて諸手の持口の圖を銘々にしるして見よとの上意のとき、越前の持口の敵城のかまへを、まもることとし、彩色圖して出だされたるを、神君一目御覽有りて役に立たぬ男なりと有りて、御見限り有つてのち其後不和なりしとなり。惣

じて敵城の圍なきは、鹿相にさつと圍して出すこと古法なりとなり。神君はかやうの古法よく御覽ありて、武の法くばしく御吟味ありたる名將なりし故に、天下も御手に入りきと申されしなり。

七三 大阪の役木村長門守を井伊家へ撃ち取る事

大阪の役に木村長門守を井伊家へ撃ちとる。首尾は木村若江の村屋へ入つて割合の晝飯を食し居るを、井伊家の斥候警若内膳見て歸り、先手の將庵原助右衛門へ告ぐ。庵原鎗を取つてかゝると、木村も走り出で鎗を合はせ、二間一尺五寸の直鎗、その頃北國流と云うてはやりたるに、木村も免許を得たる功手なるゆゑ、この鎗を以て庵原が内胃を二三ヶ所も突きたれども鎗の穂みじかく切突にてちよつと突きたるゆゑ、頰の邊にかすり手なるゆゑ突きぬいて突たふすこと能はず。庵原は一箇中はごに身の七八寸ほごある鎗を、べつたりとはりのけて木村を鎗付けて突き付したるに、あとより井伊家の若士安藤長三郎来てこの首を揚げんかといふ。庵原揚げ候へというて、安藤に首を揚させ、木村が腰に指したる白熊の旛を引きちぎりて、庵原が腰につけて引きとりたるとなり。此の首誰れが首とも其の時は知らされども、白旛ゆゑに大將分と見えたるゆゑに、後證のために庵原とりて腰に付け

かるとなり。後に木村が首と知れたるゆゑ、安藤も元來庵原氏が鎗付けたれば、首を揚げたるまでと斷りたれども、庵原は井伊家の老臣、年七十有餘にて常に腕に珠數をかけて念佛のみ唱へたるに、向ひ來る敵ゆゑにやむことを得ず念佛を唱へながら敵の鎗をはれて鎗付けたる故、己れが功とせず。若輩の士は夕様に名だかき士の首を取りたるは功名も顯すゆゑに、強ひて安藤にゆづりたり。故に首帳には安藤が姓名を記し出だして安藤が武功とし、今に至つて木村をば安藤がうちとりたると天下に稱するは、庵原武功にておとなしき仕形故となり。右正泉義郷の直談なり。詳に其の合戦のこと三所戦記にみえたり、木村勇士なりといへども若將ゆゑ、晝飯の喰ひ時分期をおくれたるゆゑ、晝飯を喰ひかゝりたるとき敵に見付けられたるゆゑ、わりこの飯を二三箸ほご食したるとみえて少し喰ひかけたる迄なりしと、撃死のち晝飯を食したる村屋へ入つて見しに、右の如くなりきとなり。是れ亦義郷の咄なり。

七四 松平讀岐守殿具足屋岩井孫四郎物語の事

松平讀岐守殿の具足屋南都岩井孫四郎の咄に曰はく、南都知是院に塙の關右衛門甥村藤左衛門と

云ふもの、所持せし頬當あり。是れ則ち塙園右衛門所用の頬當なり。その製面頬に涎掛を不仕付、惣地を漸赤く人の面の色の如くにぬり、頤に髪をばやしたるなり。是れ甲冑を着し喉輪をかけ、只行軍の行装に喉輪の上に此の面頬をかけんが爲に、如此製したるならんかとなり。右の面頬はぬり物に紀州の雜賀孫一の作の由なり。園右衛門と舊友にて造り與へしとなり。そのころ孫一は武功の士にて、慶長五年伏見の城にて島井彦右衛門殿を打ちとりたる名士なり。細王の名人にて、殊に頬當の製形無類にて、函入の家にて名作と稱するとなり。右の桶村藤左衛門は極賞の浪士にて、南都知足院に縁有りて。知足院の住持二三代にもか入り居て、則ち知足院にて病死せしとなり。死後屍を沐浴せしむりて、裸體になして見るに、右の方腰に下帯に金子十兩付けてあり。此の金子數年付け置きたると思へて、腰に此の金子のあたりたる處くちて居たるとなり。右の藤左衛門至極貧窮なりといへども、具足一領・鎗一本を放さずして所持せりとなり。則ち右の具足の中に伴の頬當も具し置きけるなり。

七五 米倉丹後が子彦十郎鐵砲疵妙薬の事

氏康公松山が攻むるとき、信玄に救を乞ふ。このとき甲州の士米倉丹後が子彦十郎砲玉に中りて死

なんとす。甘利左衛門が組なれば、甘利米倉が陣屋に至りて傷を見る。手負の血脈に落ちて死なんとするに、蘆毛馬の糞を水に立て、用われれば必ず功ありといふ者あり。米倉が僕これを調じてすむ。米倉不飲して曰はく、これを飲んで必ず可生か可死か未だ知らず。果して死せば不飲とも有らん、たとへ生きたりとも、畜類の糞を飲みて其の恥を如何せんとして、服せず。甘利色を正して御邊の曾曾て理なし。命を保ちて忠をなし孝を行ふは道の重きにあらずや。獸糞を飲みたる恥は輕きにあらずや。小辱を不忍して大道捨つるは狂するに似たり。是れ男のみ有りて智を不盡の失なり。この藥のみにくきこともあらん。我れ先へ試むべしとて、二口三口呑みて舌打して、甚だ呑みよしとて米倉に興ふ。米倉理に伏し則ち服し則ち快復することを得たり。信玄聞きて甘利を譽めらしこと甚し。或人曰はく米倉終に糞汁をのまずして死せば男にのみ儼するもの、是れ潔事に思ひ、この類の藥を思ひ嫌ふ風俗となり、後來幾人が横死せしも計るべからず。且つ陣中にては専ら如斯手輕き藥を以て珍とすべし。

七六 佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合戦の事

佐野修理亮宗綱は下總唐澤に有り。足利の長尾但馬守顯長と郡邑を争ふ。或とき宗綱は岡崎山に陣

し、顯長は唯木山に屯す。兩山の間に小川あり。これを隔てて日、足輕攻合のみにて、未だ勝敗なわ
 かつた。時に顯長兵を返す。其の體嚴肅なり。宗綱も同じく師を引き返さんとす。密に兵を分ちて、
 山間の樵路より兵をすいめ、大沼田といふ所に廻り、顯長が前路に令出。顯長これをしらず、宗綱も
 陣拂して段々に引き行く。今は漸々途に隔りまた後襲の恐れなしと思ひ、用心の備帯怠り、踏勢の足
 を亂して引き行く。宗綱は廻備の出合ふ程を量り、俄に旗を還し、顯長追廻備の勢續合に出で、顯長
 刀鎧を突けば、顯長は大に敗れて追討に逢ふもの甚だ多し。宗綱思ふまゝに利を得て唐澤にかへる。

七七 上杉彌五郎が事

はなやまのたのむとてかると、
 島山修理大夫義隆能登を領す。毒害にあひ卒して後、家臣遊佐彈正・沼井備中・長野馬を始め十一
 人その勢二千計七尾の城に籠り信玄に従ふ。上杉彌五郎義隆の伯父なり。越後に在りて此の由
 を聞き、謙信に乞ひて七尾を攻め落し城兵を誅せり。謙信義隆が先登の功有るを以て、能登は代々島
 山の領なり。義隆に預けんとの内意あり。能登の兵士これを聞きて、義隆出生有らば我我も同じく世
 に出でんと追ひ追ひ馳せ來ること懸し、謙信柴山といふ所に陣し、惣人数の押前を見んとて、謙信

は床几に腰をかけ、義隆は側に畏まり居り、能登先鋒の人数美々しき物具にて出で來る。謙信人を遣
 はしてこれを問ふ。彼の勢上杉彌五郎が勢なりと答ふ。次に通るもその次に通るも、みな彌五郎が勢
 なりと名乗り懸しき多勢なり。謙信氣色變じ暫くして彌五郎にむかひ、三好宗三は五畿内にて弓矢
 功者の名將なり。宗三常に人数は難遣のものなり。三百騎より上の勢は遣はれぬものなりと、度々云
 ひしと聞けりと言うてふたしび詞なし。謙信死去までも彌五郎をならまへ、勘當同前にて能登も與へ
 ずして止みの。彌五郎後島山入庵と號す。

七八 佐久間河内守物語 井渡邊内藏助が狂歌の事

佐久間河内守實政物がたりに、大阪御陣のとき鳴野合戦のとき、小栗亦市吉忠と我れと兩人檢使に
 仰せ付けらる。但し十一月廿五日に兩人鳴野へまわり、明日今驛口の柵をいたすべく旨佐竹義宣仰せ
 付けられ、屋代越中守・伊東右馬允・安藤治右衛門遣はさる。景勝も明日鳴野口の柵をとり申さるべ
 く旨仰せ出ださる。直江山城守兼續申し候ふは、一昨日奥州より到着仕り候ふ故、人馬の足を休め其
 の上のごとに仕りたしと申す。佐久間小栗申し候ふは、謙信以來着陣その儘にも御一戦と承り及び候

ふ。山城はいなことを申され候ふと斷り候へば、直江上意重く候ふ間明日とりつめ申すべく旨、御請
 け申し上げ候ふ。廿六日早天より景勝人數を出だされ候ふ。城方の櫓は井上五郎右衛門・渡邊内藏介。
 井に大野修理亮治長手のもの加はり、山市左衛門尉吉正・小早川左衛門・岡村掃之助・竹田兵庫・其
 の子大助、二千餘にて櫓三重なり持ち固め候ふ。前の夜景勝は直江山城を呼び備へ、組をとばる。直
 江申し候ふは老功にて候ふゆゑ、安田上總介を先手に申し付け、二の先は須田大炊申し付け候ふと
 きたふ。景勝そればあしき配立なり。二の目功者にてなければ軍勝はなし、須田を先手に安田を二の
 先に立つべしと有るに付き、直江備をくりかへ申し候ふ。これにより須田備は競へて二の先の安田手
 より手柄して見せんと勇み候ふ。安田備は先手を二の先にくりかへられ口惜しく存じ候ふ、先手崩れ
 るかし二の手にてもり返し一手柄せんとはげむゆゑ、兩備の士卒中々勇氣十倍になる。景勝勇才凡人
 の及ぶ所にあらずと感狀あり。さて廿六日曙に大阪方へ取りかゝり、山市左兵衛大將にて鐵砲、大
 將井上五郎右衛門等櫓の外へ出でて防ぎ戦ひ候ふ。須田大炊先手にて景勝眞先にかゝり候ふ。勝負
 數度これ有り候ふ。上杉方多功豊後守手柄高名なり。北條清右衛門・上泉主水・櫻圓獄・大股八左衛
 門・同彦六郎手柄をふるまひ討死す。須田大炊下知して遂に打ち勝つ。大阪方井上五郎右衛門を討ち

とり、櫓二重をとり押し込み申し候ふ。大阪方山市左兵衛・渡邊内藏介敗軍その場をとりしき候ふ。
 景勝は鳴野の横堤に旗本を立て、直江山城守に申し付け、鐵砲左衛門に鐵砲三百挺遣はし、物場より
 はるばる南大和川の堤をほりきり、蘆谷に足輕を取り立て固め候ふ。上杉發申し候ふは、小口とはは
 るばる脇をとり固め候ふと不合點なる手配とつゞき申し候ふ。その日午刻に、大阪七組青木民部少
 輔一之・伊東丹後守長實・速水甲斐守守之・中島式部少輔氏種・野々村伊豫守雅春・眞野豊後守頼包・
 堀田圖書助勝嘉、その時は天満口普請場にありしが、鳴野合福兩口破れ候ふ由承り、天満より鳴野へ
 かけ付け候ふ。城よりは、大野修理亮治長・木村主計頭宗重・渡邊内藏助・竹田永翁等かけ出て候ふ。
 上杉先手須田大炊介長能は石坂新左衛門百人鐵砲にて、備一の木戸口をかため打ち立て申し候ふ。半
 時ばかりせり合ひ候へども、大阪方大軍ゆゑ眞黒にかゝり候ふ。上杉方鐵砲大將石坂新左衛門場をさ
 らず討死、組勢廿餘人討たれ須田大炊頭立てられ候へば、二の先安田上總介兼ねて備を臨へ押し出だ
 し立て候ふゆゑ、須田備は景勝旗本前へくづれ申し候ふ。此の時上杉方島津玄蕃は敵大勢にわたり合
 ひ、沼の中へ突き落され、起き上り鐵砲を合はせ、大阪方をつきちらし手柄仕り高名。松本助兵衛・北
 村茂助もさんざんにたゝかひ、兩人ともに高名仕り候ふ。市川左衛門・針生市之助・原庄兵衛・駒澤

與五郎をはじめ、上杉家突強の兵杖をならべ討死仕り候ふ。須田大炊備ほぐれかゝりしに、景勝旗本前備は梶原常陸介親憲鐵砲三段に立て、金の線馬印をとりて御意にて候ふ間、須田人數兩方へわかれ退き候へと呼び、馬印をふり候へば、須田備兩方へ引きとり候ふ。杉原下知して追ひきたる敵を引きうけ、鐵砲をうち立て候ふ所を、二の先にて胸へ扣へ候ふ、安田上總介采をとりて横合にやりを入れ候ふゆゑ、大阪方惣敗軍になり申し候ふ。安田が手柄中々耳目を驚かし候ふ。大阪方杉森市兵衛・湯川次兵衛・田邊八左衛門・幡枝勘解由・米村加々右衛門・平山藤藏・茨木五左衛門・安宅源八郎等返し合はせ防ぎ候へども、安田上總急に繰り立て候ふゆゑ、大阪方くづれ申し候ふ。安田勝に乗りて小早川左兵衛・岡村椿之助・竹田兵庫・同大助を初め、追討にうちとり候ふ。その内穴澤主殿介は長刀の名師にて、秀頼公の師匠にて候ふ。高所に返し合はせ、穴澤主殿介盛秀と名のり候ふを、上杉方坂田采女組打に仕り、穴澤が首をとり候ふ。穴澤長刀を直江家來折下外記分取に仕り候ふ。さて上杉先手の大將須田大炊見え申さず、行衛不知ゆゑ、討死と存じ候ふ所に、敵中に交り大炊手柄なる太刀打直取の高名三ツ、手統一ヶ所撃り、若黨は五人ながら高名して出て來り候ふゆゑ、諸人はめ申し候ふ。扱て柵際にて、大坂方と上杉方鐵砲軍時をうつす。此の時今福口へも木村長門守重成、後藤又兵衛

衛年房・堀田圖書介勝嘉出でて一戦、佐竹義宣、先手流江内勝討死、梅津半右衛門・月村十大夫槍を合はせ、手負引き退く。加勢を乞ひ候ふ故、杉原常陸百五十挺の種が島を添へてさし遣はし、川の中洲より打ち立て戦ふゆゑ、木村長門守後藤又兵衛引き退く。佐竹その場をとり返す。それより杉原も須田・安田に加はり、鐵砲軍數刻に及び候ふに付、御旗本より五の字御使番追ひ追ひに参り、堀尾山城守忠晴を御入れ替へ有るべく間、景勝は元の處へ引きとり申すべき旨頼に仰せ遣はされ候ふ。堀尾山城守へも、早々景勝に可入替旨仰せ付けられ候ふ。忠晴長まりて、堀尾河内・同修理・前田丹後二百餘遣はし候へども、城方より大筒を出だし候ふゆゑ、堀尾人數進まず候へども、忠晴より重ねて伊賀衆手垂八十八遣はしける。御使番日々堀尾に場を渡すべしと仰せ遣はされ候ふ。景勝無興して、場をわたりし引き取るべしとは誰れの差圖にて候ふぞ。更に承り届けす候ふ。上の御意にても罷りならず。軍の習先陣を争ふ時は、一寸増すと承り候ふ。今朝より粉骨してとりしき候ふ場を、人に渡し引き取る法の有るべき。少も引き取ること罷りならず由、景勝が申すと上へ仰せ上げられよと云うて、少も不退候ふ。朝より景勝は燈も不着床机に腰をかけ城に向つて、脇目もふらず、馬廻り三百餘槍立頭を傾け畏れ居て先手の合戦見物なり。景勝は側には紺地日の丸大四半と蹴の字の大四半、只二本に淺黄

の扇の馬印押し立て候ふ。その武者立行儀の正しきこと申々會語道斷なり。士卒景勝を恐るゝこと敵より甚し。下知の聞くこと武者拵へ比類なきこと共なり。此の時丹羽五郎左衛門長重は上杉後にて陣とり候ふ。先手の戦を見て景勝旗本へ委られ候へども、上杉家作法にて備の中へ不入候ふに付き、先手へ馳せ加り申され、大阪方次第にかさみ候ふとき、直江下知にて大和川堤盧谷の柵場より、鐵砲左衛門鐵砲を横合より込み替へ込み替へうたせ候ふに付き、大阪方柵を持つこと不叶、遂に敗軍しての場をとりし景勝の勝になり申し候ふ。堀尾人數も柵を廻り、大和川洲崎より鐵砲をうち申し候ふ。その日城方鐵砲の名師渡邊内藏介大遊住り候ふ。前日野田の藤見のときの喧嘩にて、手柄有之候へども、今日は上杉方に追つ立てられて人先に逃げ申すに付いて、

渡邊が浮名をながす鳴野川敵にあうては目はくらの介
鐵兵法名人にても武道にては役に立たざること勿論に候ふ。今日景勝下知にて、大和川の堤を堀きり脇をふり、鐵砲左衛門をもさし置き候ふ。合戦場よりは脇にて候ふ故皆々不審仕り候ふ。柵も堀切も敵付きてこそ尤もにて候ふ、とてもなきことにて候ふと吹き候ふ所に、後の合戦に鐵が手より横鐵砲打ち候ふに付き、遂に大阪方敗軍景勝の勝になり申すゆゑ、諸人景勝の勇氣淺からざるを感じて名將

なりと舌をふるひ候ひつる由、その晩鳴野より佐久間河内・小栗又市・住吉御本陣へまかり歸り合戦の次第申し上げ、御次之間にて小栗又市申し候ふは、さてさて今日能い打所有りしを打ち候へと申したれども、日暮れかかり候ふとて、不_た打。餘りのこり多きに、直江に足輕をかせ我れ討つて進むべしと云ひたれども、日暮れかかり候ふとて足輕をかさず、殘多せんかたなかりきとかたる。隙子を隔てて、家康公御聞きなされ其のまゝ御氣色かはり御きげん損じ、やあ又市己れが分にて景勝武邊に討りたては無用なり。推參なること申す大たわけめとさんさん御叱りなざる。又市赤面して罷り立ち候ふ。鳴野合戦の翌日、兩御所様御同道にて鳴野を御巡見なされ、上杉陣場御通りかかりし時、上杉總て手より城へ鐵砲をつづけ放す。但し御大將御巡見の時、作法故實の由なり。さて景勝町場道節砂をもり、水を滴き中之掃除さらびやかなることなり。景勝も直江一人供にて罷り出で、手を地につき御目見、家康公仰せられ候ふは今日は、當表にて、其の方人數骨折り候ふよし御懇の上意あり。景勝御請童部いさかひにて御座候ふ故何の骨折り候ふことも無御座と御挨拶申し上げられ候ふ。後日に上杉家入須田大炊・杉原常陸・島津立憲・鐵砲左衛門御感狀下され候ふ。皆々御前へ召し出だされ候ふ。如此三人は御感狀を戴きて罷り立つ。杉原常陸ばかり御前にて御感狀ひらき拜見仕り、元のことく巻

納めいたゞきて懐中あり、本多佐渡守に向つて御吟味御文旨のこる所もなき、忝き仕合と申し上げま
 かり立ち候ふ。みな人感じほめ申し候ふ。その砌、上意には今度上杉家中手柄あり候ふと仰せられ候
 ふ。常陸介とりあへず、輝虎以來弓矢のあたゝまりのこり申し候ふよし、御挨拶申しまかり立ち候ふ。
 諸人感じ申し候ふ。上杉二の先、安田上總介今度鳴野にて第一の手柄いたし、横やりにて大坂方突
 くつし、味方の勝になり候へども、直江山城と中あしき故、書付に入らざるゆゑに上聞に達せず。御
 感狀不被下候ふ。その後景勝が所へ皆々を呼び出だし、今度鳴野表にては何れも精を出だしく候う
 て満足いたし候ふ。去りながら大阪弱敵なり、輝虎以來武邊になれたる處なれば、氣道もなくあぶな
 げもなかりきと申さる。安田上總介進み出で各々仕合よく上聞に達し、御感狀拜領にて目出たく存
 じ候ふ。我等一人は誰れも取次不申。御感狀拜領仕らず候へ共、昔より數度合戦に随分と奉公申し上
 げて、人をば越ゆれども人に越えられず候ふ。その上今度程のこと我等功に立ち申す様無之候ふ。今
 にはじめす。珍しからざる事に、就中我れ等に不限、屋形様へ身命を擲つて穢き候ふ。曾て公方への
 御奉公だてに仕らす候ふゆゑ、御感狀少しも望は存せず候ふ。以來とても殿様へ御奉公に命を捨て可
 申候ふ。公方へ奉公だて仕るべく、子細なければ御感狀誤しく無之と申し候ふ。また杉原常陸は今

度御陣に重代の物具古く見苦しとて、猿樂の法被を衣て大阪へ立つ。家康公御覽なされ上杉家古き風
 にて錦の兜直垂を着たり。皆後學に見置き候へと上意成り候ふよし。杉原老武者殊におどげ者にて、
 古き鎧見苦しとて上に能の法被を着てたりしとなり。後日に杉原歸陣して皆々に語り候は、扱て扱
 て今度は思ひよらず御感狀拜領して、子孫の寶を得たることや。其の故は今度大阪の戦は子供いさか
 ひのつぶて打合の様なるされことなれば、別に恐しきこと骨折ることもなきなり。昔關東や越後など
 にて今日死するか、今か今かと思ふやうなる烈しき合戦に、明暮合ひたるときだにも御感を取らず。
 今度の様なる花見同前のごとに、上様より御感狀とりたりと大に笑ひたる由。

拾遺卷の四

七九 岐阜攻の時川々洪水によつて後藤又兵衛尋問の事

關が原御陣前々福島正則・池田輝政外大名十二頭にて岐阜の城を攻むる。黒田長政・田中兵部少輔・藤堂高虎・桑山伊賀守・戸川肥後守は大山押に居る。岐阜を攻むる最中に、大山の城明けのき候ふに付き、長政・高虎何れも、岐阜へ推しつめ候ふ内、岐阜落城に、長政高虎等殘念に思はるゝ所へ、岐阜後詰として、大垣より石田三成・島津義弘・小西行長二萬餘りにて江土川迄押し來る。長政・吉政・高虎、桑山・土川等 幸と悦び江土川へ馳せ向ひ、大垣勢漫々と川向に備へたるに、八月の雨洪水増して、瀬枕打つて流れ早く水事々出づる。何れも香が島村の札の辻に集まり、五人の大將は床机に腰をかけて居る。家老功者どもを集めて談合する。川をこえて合戦利あるべきか、又こさずして利有るべきか、勝負の所談合に時を移す。されども一決せざる時に後藤又兵衛政次頭形の兜に孔雀の引廻しに、五尺づゝ出でたる銀の天衝のつり立物し、黒母衣かけたるが遠々に長り居る。高虎申され候ふはあれに罷りある銀の天衝は、黒田殿御内後藤又兵衛と見えたり。呼び寄せかれの了簡を尋ね聞かんとあり。長

政の日はく皆歴々寄つて埒あかさる談合を、何とて又兵衛了簡仕るべきやと謙なり。高虎左様にてこれなく候ふ。又兵衛はこびたることを申す者にて候ふとて扇にて召され候へば、又兵衛黒母衣ゆりかけ參り畏まり候ふ。藤堂申され候ふはいかに又兵衛、此の川を渡して利有るべきか、川を前に當て渡らずして利あるべきか、先程より相談極まらず、汝が了簡を尋ぬる所なり、川をさし渡さず勝負いかんとある。又兵衛につこと笑ひ、先程よりあれにて承り候ふ。憚りながら各々様こゝは御相談所と不存候ふ。その子細は今晝おそく御座候うて、岐阜の手は御あひ不被成、何を以て内府へ仰せ立てられに成され候はんや。爰にて御一戦なされずば、恐れながら各々様男と成り申すまじく候ふ。勝つにも負けにもかまはずのりこえ、一戦遊ばされ此の川を基所になさるべく候ふと、眼に角を立て申し候へば、諸大將手を打つて扱て扱て尤も至極なりとかく云ふに及ばずとて、江土川をこえ、大利を得られたるとなり。大阪表今福合戦にも又兵衛鐵砲にあたり疵をさぐり見て、大阪の御運もまだ強きを我が手淺しと云ひたりとぞ。

八〇 家康公慶長五年七月會津御發向の事

關が原御陣起り候ふはじめ、慶長五年七月家康公秀忠公數萬にて會津へ御發向なされ候ふ。これは
 景勝上洛いたされず、香椎原に新城をとり立て、諸浪人を集め道橋を修理し、籠城の用意を申し召し
 御退治のため此の如し。景勝大に驚き香椎が原新城は、直江山城守上意得て公儀濟みたる上なり。又
 在國は秀吉公御在世の砌り、五年在國の御いとま濟みたる所なり。然れども押し付けて御征伐も有り
 候ふは、弓矢とる身のならひ一矢仕るべしとて、百三十萬石の諸侍のこらす呼び集め、御菩提所雲
 洞院と謙信御影堂毘沙門堂に於て一紙の起請文を書かせ、妻子を會津の城へ籠め口々に燒草を込め
 おき、景勝は家老物頭をあつめ、會津は七口あり。殊に背炙南山口は會津を見下し、中々籠城なる所に
 てなし。家康公御父子白川口に着陣候はゞ、逆寄に仕かけ野合の一戦をとけて勝ち候はゞ、あとを遺
 うて江戸は扱ておき都迄切つて登るべし。負け候はゞ士卒もろとも白川を枕にして討死仕るべく候
 ふ。下野と奥州の境白坂より登川まで二里の間、草籠が原といふ所あり。よき戦場なれば竹木を切り
 かけ地形を切り平げ、白石城を大手の一の木戸とし、一番合戦は安田上總介一萬三千餘、二番合戦は
 島津月下齋二萬七千餘、白川の城に籠り、家康公御父子御着陣候はゞ、草籠村へ押し出だし一戦し、
 若し勝たずば白川の城へ引きこもり、四方の人数同枕に討死を遂ぐべしとさだめ、士卒上下織織子血

脈を頭にかけ家康公を待ちかけ候ふ。景勝只一騎背炙南山口の嶺にのぼり、長沼の地形を見て、それ
 より樵夫を案内者にして山中を通り、白川口境の明神にいたり、人数押し道の見積り、密に了簡を
 定め候ふは、家康公白川の城を攻められ候ふ處を長沼より兼れて見置き、山中を人数引き境の明神
 にいたり、家康公陣取の後へ出て旗本へ切つてかゝり、手詰の勝負を決すべしとつもり置き候ふ。上
 杉家中にたれも知るものなし。近日に家康公御着陣、御先手榊原式部大輔康政すてに太田原に着く。
 太田原は白川より一日路なり。景勝これを聞きて八千餘を召しつれ、ひそかに會津を出て、南山背炙
 をこえ、此の山を背に當てて長沼を取り、家康公白川表へ御着陣一戦候はゞ、山中を推着思ひもよら
 め後へ廻り、家康公御旗本へ切つてかゝり申すべき覺悟にて陣取り候ふ。八千はあまり小勢にて候ふ
 と家老も異見仕り候へども、謙信以來の吉例とて承引無之。直江・齋藤・千坂等申し候ふは謙信公
 御代の古兵共過半死に失せ、物なれざる人数は八千はいかに候ふと申し候ふ。景勝は勝利を得ば八
 千に不過候へども、皆々申す所餘議なしとて許容有り。是れにより千坂・齋藤・新津・三室寺等二萬に
 て長沼へゆきたり候へども、景勝さしづにて三里あとに陣どり候ふ。若し家康公白川へ御着陣候はゞ
 御大事に罷りなるべく候ふ所に、土方にて治部少輔をはじめ、五畿内・西國一圓に亂れ伏見へとりか

かり候ふ由、家康公小山より江戸へ御歸城なされ候ふゆゑ、景勝手立相違仕り候ふ。若し白川城御攻なされ候ふとき、景勝八千にて御後より不意に仕かけ候はゞ、ほとんご御一代の御大事たるべきに、とかく御運つよき御大將とその以後とりさた仕り候ふ。右の通り故景勝も會津へ引き入れ申され候ふ。

八一 秀吉尾州進發の事

秀吉尾張に發して信雄・源君を征せんとす。先づ泉州岸和田の城中村式部少輔一氏を籠め置き、紀州の根來雜賀の一揆を押へしむ。信雄密に根來雜賀の一揆をすしめて、秀吉大坂を發せば必ずその勳を費めて、秀吉の巢穴を破れといはせられれば、一揆等同意して天正十二年三月十八日、二萬ばかり海陸に分けて堺の浦へ働き出で、大阪の空虚を襲はんとす。一氏下知して大敵なり。容易に戦はゞ尾張の合戦に害あるべしとて一人も不田。泉州の國侍に眞鍋五郎右衛門貞成威遠手勇入夫十七歳一氏に従つて陣中に在りしが、一氏に乞ひて一揆船手を働くと見え候ふ。某在所大津に家人の子妻を差し置き候へば、参りて片付け候はばやと申しければ、一氏老もなりとて之を許す。眞鍋手勢百廿餘にて大津へかへれば、舟手の一揆大津を差して押し来る。大津の混亂斜ならず。留守に残りたるものごも昔小

城のありし跡に、妻子を連れ行き戸板懸などにて圍ふ所へ、眞鍋出で来れば少しは安心すといへども一揆は千餘騎味方は百餘、對當すべきにあらざれば、士卒危み恐れて敗走の機あり。眞鍋が輿力に秋山亦之丞と號する大剛の勇士有り。其の已前一日に鎧を七度合せたる程の覺の者なり。眞鍋に向つてかやうなる時節が肝要なり。大將の心うるたへる時は士卒役に不立ものなり。よくよく合點ありて下知せられよと云ふ。眞鍋その仕形は如何。秋山が曰はく、今の仕形三ツ有り。第一は妻子を古城へとり籠め、城に據りて戦ふか、第二は妻子を堺の津へ退けて、我れ我れは眞丸になり圍をつき破り岸和田へ駈け入るか、第三は妻子を連れて堺の津へ退くか、此の三つより外なしと云ふ。眞鍋兜の緒をしめながら三ツの謀上中下は如何。秋山が曰はくその一は上、其の二は中、其の三は下なり。眞鍋しからば妻子もろとも古城に據りて戦ふ謀を用ぬん。秋山聞きて左あらば一人ものこらず撃死すべし、不苦や、眞鍋が足をふみ刀を抜いて金打し、愛宕八幡こゝに討死すべきぞと言つて思ひ切つたる有りさまなり。士卒是れに勵まされて必死を思ひ定めたる體なり。眞鍋海上を見やれば、敵船已に近付けり。敵は十倍の勢なり。取り巻かれては叶ふまじ、迎へ戦つてこそとて濱手に出でて備を設く。田賀井別齋・秋山又之丞下知して敵の舟より半上る所を鐵砲を打ち立てさせれば、敵兵打ち挫かれてか

かりかれたる處を、眞鍋白旗を振つて先隊八十餘騎小松原より突きかゝり、眞鍋が兵田賀井左吉右衛門一番鎧を合はせ一揆を追つ立つる。惣軍亂れ討ちて、一揆を海へ追ひ没して討ち取る數多し。やうやう返し來る敵をば、眞鍋が兵波防の芝手に弓・鐵砲を伏せて、打ち立て打ち立て防ぎければ、敵船さんざんに亂れて、遙の沖に引き退き、あへて寄る可き氣色もなし。一氏は眞鍋が如何と思ひ、隣須賀小六家政後阿波守通に二千餘騎差しそへて迎に遣はしければ、眞鍋は思ふまゝに勝利を得て、妻子を引きつれ、隣須賀と打ちつれて岸和田にかへる。

八二 朝鮮陣中加藤清正馬の糠下知の事

朝鮮の役に加藤清正の陣所糠なくして、馬を飼ふに苦しめることあり。清正聞きて糠なくば、細かに切り、大豆に交せて飼へと云はれしかば、諸士教の如くして馬も能く食して苦しむことなし。近世明曆年中江戸大火に依つて人馬の食乏し。御旗本の士新庄内藏助古老の士に聞きけること有りとして、稻の刈残を掘り泥を洗ひ去つて飼はしむるに、馬の力落ちざることを得たり。

八三 秀忠公三州田原御狩の事

慶長十五年の春參州田原にて、秀忠公田原を催され、本多中務大輔・九鬼圖書と併に依つて、御旗本にて見物せらる。圖書忠勝に向つて勢子凡そ六萬も有る可きかと申しければ、忠勝夫れ迄はあらずに四萬二三千も過ぐべからずと申さる。圖書某見る處と懸隔なる違なりと心得ざる顔色なり。忠勝の曰はく、されば高山より平原へ押し並べたる人數は小勢も多く見え、谷に集まりたる人數を山上より見れば、多勢も小勢に見ゆる物に候ふ。これを以て打ち見たる處は廿萬餘と存じ候へども、ひかへて積り候ふと答へられぬ。

八四 細川家鐵砲口藥入の事

細川家は足輕の鐵砲口藥入、革にて鼻紙袋のごとく縫ひ用ゐるに、事の急なるときに至つて、指を以て捻入るるに利有りといへり。

八五 秀吉岐阜攻の事

豊臣秀吉は智謀のみにあらず、天運に乗じたる人なり。織田信孝岐阜の城に據りて秀吉を拒む。これ柴田勝家と約して、秀吉岐阜を責めば我れ柳瀬より出でて、秀吉を挟み討たんと謀る處なり。秀吉これをしらず。已に岐阜を圍まんとする前夜、甚雨有りて呂久江戸の河水激浪滔々たれば渉ること能はず。川の此方に陣す。勝家柳瀬に出づれば、秀吉岐阜をすて、柳が瀬に向ひ。洪水の故に信孝尾撃すること能はず。勝家の謀は却つて不意に遇ふ端となり、又甚雨洪水は秀吉を救へるにあらずや。後小田原の城を圍むとき、城南の海上は海賊九鬼大隅守をして兵船をのり廻し、圍の手を合はせしむ。攻城の間五十餘日一日も東風なし。若し東風あれば舟を置くと成り難き處なり。其の後小田原の海上東風なき日は、上様日和と云ひならはせり。

八六 源君久世三四郎坂部三十郎へ物見仰付らるゝ事

源君あるときの戦に、久世三四郎坂部二十郎を遣はし敵合の様子を見せしめらる。兩士御前を立

つとくに阪部は顔色勇進みたる體にて退出す。久世は顔色快からずその品悪し。御前に居られたる小姓の中に久世が體を笑ふ人あり。源君御恩従の方に向はせ玉ひ、坂部は生得の剛者なり。此の故に敵を何とも思はずして心に勞することなし。久世は生得坂部に及ばず、然れども勤め勤みて武勇を働かんと思ふ故、少しも様子二方ならば生きて有るまじと覺悟する故心に勞あり。今見よ久世は坂部より二三町も深く働き能く見届けて歸るべきぞと仰せらる。無程兩人歸り來り、坂部より久世四町計先達つて能く見届けて敵のやうすを申し上ぐる。源君そののち右の兩士を評して、久世は心に剛なきを知つて生得の剛有るものに劣らじと勵むゆゑ、その働一際踏みしめたる處有つて奥深し。彼が武功はいつとても成易きものと覺えたれば、怠心ありて鍊らざる處ありと仰せらる。品替りたれども是れに同じきもの有り。觀世左近は諺に名を得たる者にて剃髮して安休と號す。人に語りて諺に三病有り。聲の能きと、覺えのよきと、拍子の能くききたると、此の三事備ふもの多くは諺に成らずして止む。これ器用なたのむものは自ら落てりとす。此をもつて工風積まず、功勞を重ねざるは、階級の奥意を知らざるといへり。

八七 豊前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事

秀吉黒田如水をして豊前國に封ぜらる。日隈の城に一揆あり。如水の嗣子甲斐守長政兵を發して攻め亡し、その外所々の戦に利を得て武威廣大なり。然れども紀伊谷の紀伊彌三郎籠房のみ従はず。その勇略逞しきこと等倫する人なし。長政是れを攻めんと望まるれども、如水之れを許さず。長政本意なきことに思ひ、如水に忍び密に紀伊谷より取り懸りて之れを攻む。紀伊が兵勢盛んにして、長政の士大に破れて討たるもの數を知らず。長政馬を深田へ乗り落して、鞍爪まで泥に沈みてせんかたなし。長政が馬は大龍寺とて九州一の名馬なり。長政今こそ馬を捨てば、敵に奪はるゝこと口惜しく思ひ捨て乘れたる所へ、菅和泉守政利見て、我が馬を長政に進めて行歩立に成りて引かんとす。長政管が馬にのり、大龍寺を敵に奪われなば甚だ恥辱なりと引き上げて來れとて退かる。管は跡に残りてさまざまとすれども、大尺なる馬の深泥に没しぬれば、如何ともなしがたし。管今はせん方なく片々の鎧をばづし持ちかへり、随分と秘術を盡くし候へども、七八人の力ならでは掲げ難く候ふゆゑ、鎧を片片取り歸り候ふとて出だしければ、長政能く計らひぬとて感ぜられたり。如此置なきときは敵に奪ひ

取られたるか、人の疑を得るものなれば、かく計ひて虚説の譏なかられんが爲めなり。

八八 清正の士腰兵糧を持たずして不興の事

加藤清正の士あるときの城乗に、金の熨斗附の大小をさして塀をこゆるに、後より尻を押し上ぐるものあり。我れを押し上ぐるよと思ひ乗り上り、後に視れば熨斗附のさやを切り廻して金を取られたり。人皆油斷なりと沙汰す。清正が曰はく、城乗を心として後を顧みざるは勇士なり。但し金ののし付を指したるは若輩の故なり。戰場へさやうの美麗なる物をば用ゐざることを知らずと覺ゆ。未だのもしき若者なりといはれたり。また或陣の野戦にて盤辨當を遣ふに、或兒小性腰兵糧を帶せず。その倍父焼飯を分ち與ふ。清正これを視て、小年の花車風流もときによれり。陣中にて兵糧を持たざるは武備に怠れたり。過代に馬を取り上ぐべしとて乗馬を取り上ぐ。伯父若年のものに心を付けて數ふべきに、武備勵ましめざる科勃に同じとて、是れも馬を取り上げられたり。

八九 直江山城守伊達政宗に加勢を乞ふ事

直江長谷堂を攻むる時、義元加勢を伊達政宗に乞ふ。石川彌兵衛に兵衆二千餘騎をさしそへて遣はす。石川兵を三手に分けて長谷堂に趣く。戦に及んで最上勢石川が兵を上杉勢と見違へて、味方討に遭ふもの多し。石川始め我が一隊の相印を上杉方へしらせざりしが故なり。援兵にさへれては先づ相印を示し、制禁を問ふこと定まれる軍の法にて知慮にも及ばざることなり。然るに石川拙して無益の兵衆を亡ぼされたり。

九〇 赤井悪右衛門武勇の事

赤井悪右衛門は本小身の士たりしが、武略を以て漸盛になりてのち丹波牛國を領す。但馬比賀美に一將有り、二萬石許り。驍勇にしてしかも要害の地を前に當てて拒ぎければ、赤井攻むれども利あらず。赤井古への兵書を讀むに、地を攻め人を攻めずと云ふ語あり。是れに心を得て彼の勇將を要害の地よりおびき出だし、一戦に大勝して其の首を斬りその地を取る。

九一 源君長久手御馬揃の事

勝負の理少しの競ひ後あり。長久手の役に、源君討ち勝ち給へば、秀吉の師おそるゝ色あり。秀吉衆を督めて出でて戦はんと勇み立てられければ、衆奮激の氣を生ず。源君の兵、秀吉の目に餘る大軍を見て驚きたる體あり。源君明日軍中に令して馬揃をし給へば、味方敵を呑むの心を起す。良將のする所知んぬべし。

九二 大阪夏御陣真田左衛門佐幸村勇戦の事

大阪夏御陣五月五日の朝、真田左衛門佐幸村が物見馳せ歸りて、旗三四十本人衆二三萬計國府越り此方へ越し來り候ふと告ぐ。是れ伊達陸奥守政宗の軍勢なり。真田が士卒はや此の陣を押し出だし給ふかと勇む氣色なり。されども障子に靠れ片膝を立て居たりしが靜に答へて、左あらんと斗にて外に言ばを出ださず。午の刻計また物見馳せ來り、今朝のとは旗色かばり候ふが二三本見え、人數二萬斗。松かけ故不分明候ふが、龍田越を押し下り候ふと告ぐ。是れ松平上總守忠輝なり。幸村虚眠して居けるが、目を開きよしよし如何程もこえさせ、一所に集めて討ちとらば心地よからんものなとて、是れに取り合はぬ有様なりければ、皆早りたる心も稍々靜まりぬ。是れ大敵を恐れしめず味方を騒が

しめざるとのことなるべし。夕炊終つて後此の備所は戦に便なし。いざ敵近く寄りんとて、一萬五千餘、正奇を亂さず前後を混ぜず、騎歩次第を整へ押し出せば、敵假令十倍なりとも恐るゝに足らずと思はれける。其の夜道明寺表に陣をとり、明くれば六日の早且野村邊に至り、渡邊内藏助は幸村に先だちて、水野日向守勝成と戦ふ。紇は勝成を切り離るること五六十歩、勝成又守り返して紇を衝き退くる。互に刀闘三度に及んで紇は深手を蒙り、脇に備を引き取りをなへを立て直し、幸村へ使を以て只今の追合に疵を蒙り候ふ故、御人數駆引の妨と存じ脇に引き取り候ふ。且つ横を討たんとす。勢を見せ候へば、味方の一助たらんかと申し遣はす。幸村御働目を驚かし候ふ。是れより我等受け取り候ふと答ふ。備を進むれば正宗の多勢見かりきたる。町の地形前後は岡にて上平なり。中間十丁ばかりひきくして、道左右田崎に連れり。幸村已に兵を前めんとするとき、命を下して兜を着せず鎧を取らせず、馬の傍にひき添はせ、下知せんときを待たせたり。敵合十町斗になりければ、幸村使番を以て兜を着せよと云ふ。爰に於て皆持たせ置きたる兜を取つて打ち着、忍の緒をしめたりければ、勇勢新に加はり兵氣ますます盛なり。敵合已に一町斗にならんと思ふとき、幸村又使番を以て鎧を取れといふ。諸士手々に鎧を取りて穂尖を敵方に差し向けたれば、面々いかなる堅陣剛敵なり

とも打ち碎かんと、別に魂を入れたるがごとし。此のとき幸村が先手半過ぎ岡の上に押し上りたる處に、正宗の騎馬鐵砲八百挺を、先手より一二町も前んで一同に打ち立てたるに、鎧子の飛ぶは雷の如く火藥の光電に似たり、煙は忽ち雲霞となりて丈尺の間も見えわかず。幸村先手の土混々と打ち斃されて、死傷するもの多かりしが、一足も退く心のなかりしが、兜を着鎧を取りたる氣勢の壯なるが故なり。幸村煙の中より先手に爰をこらへよ大事の場ぞ、片足も引かば全く没すべしと下知する聲耳に徹し、鎧の柄を握り平伏になりてこたへたり。幸村下知して、砲聲の絶え間に十四五間程づつと走り行き居敷き、砲聲の絶間にまた斯くの如くす。このとき幸村が鎧さきより一尺進みたるものあらば、今日第一の功とせんと言ひしに、一人も此の先に出づるものなし。正宗の騎馬鐵砲といふは伊達家の士の二男三男壯力のものを探びて、本より仙臺は馬所なり、駿足を勝りのせ、奥州にて所所の戦に、馬上より鐵砲一放と定めて打たするに、申らざる玉は希なり。打ち立てられて備亂るゝ處を、煙の下より直に乗り込んで駆け散らすに、馬蹄に蹂躪せられて敵敗潰せずと云ふことなし。此の時騎馬鐵砲の土馬を入れんと駆け寄せられども、幸村の先方近々と備へて折り敷きたりと見て、漂ふ所に煙も稍薄くなれば、幸村此のしほ谷をや計りけん、大音上げ采配を振つて窺がれと言ふ。言の下

よりみな起き立ちて直に突きかゝり、政宗の先手七入町道ひ崩せり。水野日向守勝成正宗をすゝんで復戦はしむ。政宗我が軍勞れたり。戦今日に限るべからずとて、從はず。勝成また忠輝を勇むれども果さず。勝成は小勢なれば獨戰ふこと能はずして止みぬ。幸村木の刻迄合戦を待ち居たりしが、夫れより練り引きに引きとれり。其の體肅然として追ひ討つこと能はず。息は却つて彼の爲に控かるべし。東軍の諸隊見るもの感賞せり。

九三 同時木村長門守敗北の事

同陣五月六日木村長門守重成若江に陣す。勇は生れ付きたれども陣数は不敵將なれば、持口を堅めずして爰には敵なし、敵有る方に向はんとて八尾にいたり、爰にも敵なしとて本陣に歸り來る。このとき井伊掃部頭直孝の臣盤若内膳物見に出でて、重成の備未立たざるを見て、敵の虚顯れ候ふ、里程續り夜更に出でずば八尾に行きて今爰に來るべしや。敵は道に疲れ兵糧を遣はん處を討たば利あるべしと使を立つれば、直孝心得たりとて軍を前め、藤堂和泉守高虎と首尾を交ぜ討ちて大利を得たり。

九四 同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事

同冬陣に越前黃門忠直の手の任寄を付けに、夜に入りて長竹を以て仕け寄るに、城中より鐵砲高く打ち出だして、士卒一人も傷まず、是れ石川數馬がはかる處なり。人譽或老士これを開きて城中の鐵砲は盡能く能くため込み土俵を以て、之を究むるときは、闇夜といへども外るること多からざるものなり、城兵これを知らずして石川が名をなせるものなりと云ひき。

九五 信玄の士小幡豊後物見の事

信玄の士小幡豊後何れの戦にか敵地にて物見に出でたりしが、歸路を敵に切り取られたり。豊後猶靜に敵合の様子を見終はり歸らんとするとき、敵兵之れを追ふ。豊後初めて通りたる道より遙に脇に在りし池へのり込み、馳せ歸りて敵の虚在りと申せば、信玄則ち兵を進めて利を得られたり。伊達政宗の士茂庭周防或時物見に出でて、伏兵に圍まれて討死す。逃走せざるは茂庭が勇なりと譽むるものあり。或人聞きて、物見は敵を見て引き取ることおそるゝにあらず。斥候は軍の勝敗に掛かる重任な

り。これを尋むるはその道を不解が故なり。

九六 鳥原一揆の時寺澤兵庫頭知計の事

肥前島原の役に、賊は有馬の古城に據りて守城す。寄手の諸將大手の門に付きて攻むる時、賊門をひらき突き出でたり。敵は高陽の地利に依りて寄手を少し押し立てたり。このとき寺澤兵庫頭の旗奉行山路將監、五騎兼れてより旗差に令し、道端に生ひ立ちたる木にとりつかしめて、いかなることありとも此の木を放すべからず。堅く捉へて居よと合め置きけるゆゑ崩れかゝる勢に押し立てられず。他の備は敗軍に押し立てられて、旗色靡き亂れたれども、寺澤の手のみ全きことを得たり。

九七 源君御扈從中根左源太勘氣御免の事

松倉長門守勝家は島原肥前の國賊のことに依りて身上滅亡せり。勝家の士飯村助兵衛と云ふもの浪々して懸州廣島松平安藝守光盛の城下に来る。廣島の諸士島原のことを尋ね聞く。或時天野半之助飯村に、城中より長州の手へ夜討はなかりしやと問ふ。飯村答へてその儀なり。松倉家はその備尤

も解にし、雲火を投げ外聞を出だし、夜討などは思ひもよらずと云ふ。天野笑つて長州の家も末になりてこの意を解する人なかりしにや。古老の士あらば左はあるまじ。夜討のかゝる様にしてこそ大利は有るべけれと云へり。天野は始め源君の御扈從なり。中根左源太と號す。傍輩の士と口論して出奔し、後大坂の役道明寺口にて松倉豊後守重正に屬し、勳功有りければ御勘氣を許され、淺野但馬守長盛に仕へ、祿二千石光盛の代迄奉仕せり。

九八 鳥原一揆の時紀伊頼宣卿明知の事

同陣二月廿一日の夜城中より黒田右衛門佐忠之・鍋島信茂・寺澤兵庫守の三手へ夜討す。寄手數輩討死し、鍋島の手を竹東井樓をやり拂ひ、賊の勢甚だ強しと注進有りければ、江戸御城へ尾州・紀州・水戸の三家其の外在府の諸將を召されければ、みなこれを聞きて驚く色あり。紀伊亞相頼宣卿のみ近日落城すべし。鍋島家の井樓に火をかけし様子、城中智略のたけしれたり。心を勞するに足らず。久しからずして吉左右あらんと仰せられけるが、程なく落城の告有りしかば、人皆頼宣卿の明察を感じけり。

九九 大阪陣渡邊圖書即知の事

大阪の役に、源君渡邊圖書に加州の陣場を見て參れとて御使に遣はさる。渡邊竹東の竹一本抜き三尺二寸五分に切り、陸際までの間を打つて委細に言上す。城より矢玉を飛ばすれども中らず。後に源君與力三十騎同百人をあづけ玉へり。

一〇〇 島原攻並河九兵衛足輕下知の事

寛永十四年肥州島原の賊おこりしとき、寺澤兵庫頭の士と河内浦にたしかふ。寺澤家の鐵砲の將足輕を下知し搏たするに、立ちながら搏たしむるゆるみ、悉く北げ走る。偶々搏ち放せども敵を恐れて面を上げず。俯して搏する故鉛子は虚空にとんで賊に中らず。並河九兵衛は足輕を下り敷かせ、膝架にて打たせし故一人も退かず。隙亂れず、俯して放せども、鉛子高からずして、他の足輕の搏ちしは異なり。これ定め難き法にして左のみ奇策といふにあらず。大阪落城元和元年よりこの時迄、年月相去ること廿三年の間す。武事に疎かりしこと如此、況んや泰平已に百有餘年、常に是れを論じ是れを

習ふとも、或は其の傳亡せ其の理を遺へて未迷ひなきこと能はず。必しもゆるかせにすべからず。

一〇一 伴助右衛門水戸家へ召し抱へらるゝ事

同賊有馬の城に據り、諸將圍み攻るとき、賊強て奇手利あらず。上使板倉内膳正討死のち、松平伊豆守信綱の下知として攻を止め、竹東を付け寄せ圍むこと數重、只かれが變を待つて戦はず。伴助右衛門と號する浪士黒田右衛門佐忠之の備を借りて居たりしが、永陣の間諸人氣力疲れ、勇氣も脱怠す。伴は晝夜物具を脱かず、笠を枕として臥しける程に、相陣の者目悟しきことに稱へながら、今此の大軍に圍まれ竹東・鹿垣の内に込められたり、賊徒多く切りたり共、物具を積する隙なき軍やあるべき、餘り心がけすぎて精根つきなば、城中糧盡きて死狂の軍には何の用にも立つべからずと云ひ合へり。翌年二月廿一日の夜賊黒田の手へ夜討す。一揆の勢千百人、蘆塚忠兵衛・布津利代右衛門、大將分にて押し寄せたり。何れの陣も思ひもよらず周章不斜、上を下へ混亂す。伴はもとより甲冑を着し鎗を放さず有りければ、一番に走り出で竹東を破り押し入り、敵を突き伏せ突き伏せ二人討ちたり、此のとき未だ味方一人も來らず。賊櫓越に伴が右の腰車をつく。其の鎗を握つて引き取りし所に、

又一人伴が右の股を突く。是れをも奪ひとり、鎧二本ながら得たりしかども、腰の疵痛手にて立ち揚るること叶はず。既に討たるべき處に、黒田家の老臣黒田監物が入敷進み來て敵を追ひはらふ間に、伴が僕肩にかけて小屋に歸る。同廿八日落城には伴の疵を痛みて手に合はず、後平愈せしかば忠之伴に繰入百石與へらる。伴辭して臣は先知乏しく、且つ武功とてもなし。偶々此の度御恩にて御備の端に被差置、少々疵を蒙る迄の操有つて、過分の祿を賜はること身の幸甚だしといへども、手疵深手ゆゑ未だ愈えず、自由の働心元なく候へども、自然以後御用有らん時役に立つべしや、その段計り難く御免を蒙るべく候ふと云ふ。忠之怒つて彼れが心中知高不足と思へるならん。我が陣を借りて出陣せし上は我が家人なり、臣として主命を背く罪輕からず。彼が言は理有りて實なし。然れども武功に對し存分を止むるのみ。他家に仕へて士職に有ることを許さずとて遣ひ出されたり。程經て水戸殿中にて、水戸黃門頼房卿忠之に向ひ、我れ大望あり叶へらるべきや否やと仰せらる。黒田何事にも承り候はんと諾せらる。頼房卿笑うて先づ満足せしめ候ふと謝し、別儀にあらず、伴助右衛門と申す浪人足下構あるよし、是れを許され候へと仰せらる。忠之辭するに術なくして諾す。之に依て伴は水戸家に仕へ、祿二千石足輕三十人預かれり。

101 島原落城足輕陣佐右衛門手柄の事

同落城の砌細川家の足輕陣佐右衛門と言ふもの、二の丸の邊にて鐵砲に中り死にたる者の首をとりて、數首の中へ入れ置きたりの。忠利前髪付きたる首は別の所に並べ置くべしと令して類を分ち、忠利を以て陣が得たる首を差し示し、若し此の首賊將四郎が首とも言ふべきものなり。見知りたる者はなきやと有りしに、須佐美能之丞見知り候ふといふ。則ち呼びて見せらる。須佐美能く見届けて四ヶ年以前四郎を半年ばかり召し仕ひ候ふ。依之能く見覚え候ふ。第一の印に左の耳の側に傷あり、是れ可疑もなく四郎が首なりと云ふ。然らばとて生け捕りたる四郎が母を呼びて見するに一目見て落涙し、我が子四郎が首なりと申す。忠利則ち軍鑑知忠庵を呼びて、大將の首は髪を剃り替り有りと聞く其の通りや。畑答へて如命、大體常の如く結ひて髪を折を下へ折り候ふと申せば、忠利下部の者に令して首の髪を令結。仲間馬槍村に水を入れ來り、伴の如く結ひ終はりければ、忠利使者を以て石谷十藏へ此の首大將四郎が首に似候ふ故先づ進じ候ふ。尤も不隨猶又御吟味可有歟と申し送られければ、十藏則ち使者に對面あり。吟味の趣を聞き届け、この上は討ることなし。去りながら猶又牛捕

に尋ねしとして、數人別々に引き分けて問ふに、皆四郎が首なりといふ。十藏も上使信綱も相共に忠利の陣に來り、手柄を被賀飛織を以て江戸へ注進有り、陣にこの功に依つて新知千石與へられたり。

一〇三 松山新助の勇將中村新兵衛が事

攝津半國の主松山新助が勇將中村新兵衛度々の手柄を顯しければ、時の人愚れを館中村と號し、武者の棟梁とす。羽織は猩々緋蓋は唐冠金襴なり。敵これを見てすはや例の猩々緋蓋唐冠よとて、未戰はざる先に敗して、敢へて向ひ近づく者なし。或人強ひて所望して中村之れを與ふ。その後戰場にのみ、敵中村が羽折と匿とを見ず。故に競ひかゝりて切り崩す。中村戈を振つて敵をころすと許多なれども、中村を知らざれば敵恐れず。中村つひに戰没す。依之曰はく敵を殺すの多を以て勝に非ず、威を輝して氣を奪ひ勢を挽すの理を曉るべし。

一〇四 大坂攻の時平野村失火安藤治右衛門遅參の事

大坂陣のとき平野村に失火あり。旗本の面々馳せ聚まる。安藤治右衛門後れたり。皆問ふ如何我等

は先手を心ともなく存じ行き向うて見て參り候ふ。とく參るべきを旗本は別事あるべからず。若し變あらば先手なりと思ひ馳せ行き候ふ故、往還に時移りて遅參に及び候ふといへば、皆その心懸を稱す。

一〇五 城和泉守長盛讒言の事

大阪の冬陣の松平武藏守利隆は神崎に軍し、弟左衛門督忠繼は尼崎に軍す。忠繼人衆推し出だし、矢野兵庫・佐分利九之丞を物見として蜷江の地形を視しむ。二士歸りて兩方沼にて前狭く末廣く、身方の爲には利鮮く、敵の爲には便ありと申す。また由井伊豆・丸山豊後・渡瀬淡路を差し遣はす。三士は却つて味方の利ありんといふ。忠繼矢野・佐分利が言ふと相齟齬するを以て、其の故を問はるゝに、三士君公人敷を推し出ださせ玉ふは合戦を望ませらるゝに非ずや。身方大軍なるを見て、敵地の利なきときは必ず怖れて出づべからず。君公合戦を挑まるゝとも得べけんや。敵地の利を頼みて出だす處を、身方は大軍なり、長々と出ださせて後急に討つは、勝つことあんの内に候ふ、若し人數を向ければ、早きを善しとす。利隆公の備へ續き候はば、敵見をなして未だ戰はざるさきに引き返し候はんと申せば、忠繼汝等が云ふ所尤もなりとて、造作もなく敵を追ひ拂はる。利隆は之を見て、勇み

進むといへども、目付城和泉守永盛源君の命なりと云うて強ひて之を制す。利隆憤りて兵を收めんや否やと思惟する處に、阿部四郎五郎諸手を巡つてこゝに來る。利隆この由を告げらるゝに、阿部兄弟の身と云ひ、眼前の敵といふ、忠繼若し克はずば是れ兄弟を棄てたるなり。忠繼は之れに克はば是れ自ら快のそしりを取るなり。兩ながら武家の耻辱なれば、只進むに如かずと云ふ一言に力を得て、永盛制すれども用ゐず。利隆の將士等始より貳あらず。何をか疑て沮止らるゝや。敵を見ながら卻いて兵を收めば、師を起して此に來るもの、何の爲とかする。源君決して如此の非理の命あるべからずと云ふ。永盛齒をかみ小躍して汝等吾が言なば蔑す。その罪重し。必ず言上を遂げて一々腹切らせんぞと大に怒る。利隆の將勿論のことなり。士たる者其の君の爲に腹切らんことは本なり、所甘也とて、中津川を渡りて横すぢかへに蒐かる。敵この兵勢を見て、中途より引き入りて合戦に不及。大阪没落の後、利隆搦貳を懐き、兩陣の中に居て主客の勝負を料る。是れ弱を叛きて強を快くせんとするものなり。譏言に遇うて、源君利隆を攻めせらるべきの沙汰あり。利隆番大膳を以て、毫厘も不忠の志、非義のことなし、皆永盛が所爲なることを陳せらる。番は厮養の卒より經上り、騎士の將となりて政を預り聞く程のものなり。始終少も蹶かず、辯舌番に子細をのべたり。源君はじめ籠

を隔てて、利隆何をか陳ぜんと怒らせ給ひける。番が言ふ所理明かに証正しくして、疑悉く解ければ、籠の外に出でさせ給ひて、段々聞し召し届けられぬ、以後を愼めとの上意なり。番頭を疊に付けて拜して立たず、本多佐渡守正信御前に在りて、罷り立て、悉き上意なり。歸りて此の旨申し聞かせよとありけれども、番猶立たず。正信事濟みて起たざるは故あるかと尋ねられ、其の時少し頭を上げ正信の方を見て、憚多き申事に候へども、以後を愼めとの上意は利隆が誤なき段、未だ聞し召し届けられざる處有るかと存じ候ふ。是れより先に嘗て過ち御座なく候へば、以後も亦只今の道に候ふ。別に愼むべきのことは候はずと申す。源君重ねて已に利隆の誤過なきと知り。更に疑を遣らずとの仰なれば、その時頓首再拜して留る。正信以下座にある人々大に舌を噴羨せり。

附 雨 夜 燈 錄

一 權現様豊臣太閤に御對面の時の事

權現様豊臣太閤に御對面の時、太閤我が所持の道具粟田口吉光の銘の物よりはじめて、天下の寶といふ物は集まりて候ふとて、指を折り數へ立て申され、さて御所持の道具秘藏の寶物は何にて候ふやと尋ね申され候ふに、しかじかの物無御座候由權現様仰せられ候ふ。諸仰せられ候ふには我等には左様の物之れ無く候ふ。但し我等に至極大切に思ひ入り、火の中水の中へも飛び入り、命を塵芥とも存せぬ士五百騎所持いたし候ふ。此の士五百餘を召し連れ候へば、日本六十餘州恐しき敵は無御座候お故、此の士どもに至極の寶物と存じ、平生秘藏に存じ候ふと御答ありければ、大閤赤面して返答なかりけり。

二 權現様花女を御使にて台徳院様へ菓子を進せられし事

權現様駿府に御隠居遊ばされ、大御所様と申し奉る。台徳院様江戸より駿府に御出でなされ。二の

丸に二ヶ月餘御滞留なされ候ふ節、權現様阿茶の局を召して、將軍には年若き人なり。旅住居二ヶ月になりぬ、夜中徒然なるべし。花を便にして菓子をもたせ裏道より忍びやかにやれ。もし慰にも成りぬべきなり。我が云ひたると聞かれなば隔心あるべし。汝が心得に能くはからへと仰せられければ、阿茶の局御心の付きたる上意なりと御請して、花其の比十八歳、女中第一の美人なりしを殊に收養はせ、下女に菓子をもたせ、初夜の比裏道より密に運らせけり。内々阿茶の局よりかくと申されければ、台徳院様御上下をめし待たせ給ふ處に、花送りにて御座の月をおとづれば、台徳院様御自身戸を明けられ、花を上座に直し、菓子を取ればは御所様より下されたるなるべしとて御いたたまさされ、花早々歸られ候へと仰せられ、先には御立ちなされ、月口まで御送りなされければ、花兼れてたぐみしと違ひていらへの詞もなく、歸りてかやうかやうなりと申しければ、權現様聞し召し、將軍は律義第一の人なり。我れ梯子をかけても及びがたしとぞ上意ありける。

三 新太郎様夏目氏の忠死を御賞歎の事

三河國箕形原の合戦に、權現様御負けなされ、濱松をさして御人數崩れ候ふ時、甲州の士大將秋

山伯者下知して、黒鹿毛の馬に乗りて鎗をばもたず、采配を腰にさし度々取つて返す。武者振敵の大將ぞ（權現様御事）追つ詰めて討ち取れとて急に追つかけたり。御馬廻り残り少く討たれければ、權現様にも御討死の覚悟なされ、御馬を引き返されし時、夏目長右衛門こゝは御討死の場には候はず、早御退なされよと申して、御馬の口を瀧松の方へ引き向け、鎗おつとり、御馬のさんづなたゝみかけて叩きければ、御馬かけ出て敵と遠ざかりぬ。長右衛門踏みとまり、敵の多勢に取りまかれ、鎗の柄のなるほど戦ひて討死しけり。大猷院様の御時、御悦事ありしに、諸大名出仕にて、徳川の御家御繁昌の事さまたま物語ありし時、新太郎様（備前少將光政朝臣）や、智くの間御詞もなく御座なされしが、夏目長右衛門其形原にて、權現様の御命に代はり申さずば、かやうに御繁榮は御座まじきよしを仰せられしを、大猷院様聞し召し、徳川家の士の節義の心を今更引き起したる詞なり。知者の一言とはかゝる事なるべしと、大方ならず御悦にてありけるとぞ。

四 本多三彌木下肥後守義経辨慶を批評せられし事

本多佐渡守の弟に三彌と申すは以の外に直言をいひ出だす人なり。台徳院様に御奉行申し上げける

に、或時權現様三彌は能くする者なりと上意あり。其の後一萬石拜領なり。權現様三彌を召し、料簡を改め人柄を嗜む故ならんと上意ありければ、三彌承り、將軍様は殊の外御奉行申し上げ能く御座候ふ。あの如くなる主君にすれ申すは氣違に候ふと申し上げられければ、權現様三彌が持病又おこりたりと御笑ひなされ候ふ。又或時幸若八九郎高館を舞ひけるを御上覽の節、武蔵坊辨慶は世に勝れたる者なり。今の世には少かるべしと、權現様上意ありけるを、三彌進み出で判官殿のやうなる主君ありかれ申すべく候ふ。辨慶は御座あるべく候ふと申されけり。曹源寺様（松平御時）の御時御大名中御振廻の席にて、辨慶の事御物語に出でしに、辨慶はしき事と評判のありけるに、木下肥後守末席よりいや其の慶辨少もほしく御座なく候ふ。判官殿の料簡になり申し候へば、夏の家來は残らず武蔵坊や佐藤兄弟になり申すべく候ふ。それ故何とぞ判官殿になり申したしと久しく心掛け申し候へ共、まだ得なり申さずと口惜しく存じ候ふ由いひ出だされしかば、曹源寺様聞し召し、只今の肥州の理屈は拙者父新太郎が常申したる事にて候ふ、能き旦那になりたしと心掛け色々工夫し候へども、能き旦那に成り候ふ道合點致し申さず。書物を出だし學問仕り候へば、能き旦那の道知れ申すべしと一心不乱に存じ極め、それより恩案分別致し古の聖賢の筈を稽古いたし、寝てもさめても忘れ申さず。少

且那になり候ふ道合點いたし候ふと拙者へ申し聞け候ふ。日本國に響き渡り能く御存じの新太郎事、是如いましめ申したる段と、今の道理と一つ事にて候へば、肥州には新太郎流し申すものにて候ふ。此の上の道理之れあるまじく候ふとて御賞美ありけるとぞ。

五 板倉周防守大猷院様へ草鞋を獻せられし事

板倉周防守重宗、大猷院様におちつて足獻上有りて、是れは權現様軍中にはかやうなるが能しと上意なされ候ふを、能く賀文候うて作り習ひ候ふわらづにて御座候ふ故送し上げ候ふ。もし御用に御座候はばいかほにも獻上可仕とぞ申されける。是れは權現様御小身より御成立逆ばされ、隠しき下々の情をよく御存せなされ、邪なる人のいひなしに御取り合ひ遊ばされず候ふ故、上下の志相通じて下々懇むる者なく、終に日本の主にならせられ候ふ。今日日本をうけ保ち候へども、下々の情よく知れ召されれば叶はざるといふ事を、わらづにまて申し上げける心とぞ。

六 芳賀内藏允忠功の事

芳賀内藏允は小身の比、國清院様御右筆也。國清院様美濃の國岐阜の城を御攻め落しなされ、權現様へ御勝軍の御注進狀を内藏允に仰せ付けられ御書かせなされ、御床机に御座なされ候ふ節、城中の鹽硝藏に火入りて藥飛出でける音夥しき事にて、山の崩れ懸るが如く、人々大に驚き騒ぎうるたへしに、内藏允見向もせず少しも暇く體なかりしかば、國清院様内々感じ思召しいろいろ御試みなされ候ふに唯者ならざりしかば、知行二千石下され御寵愛あり。大猷陣の時天満橋御攻口なりしに、御先手須加左京竹たばを付くるに御人數少く候、御加勢下され候へと申し上げしかば、内藏允に見分仕り候へと興國院様仰せ付けられたり。内藏允甚染羽織を着て馬に乗り行きて見分せしに、燒跡の土藏などを楯にして扣へ居たり。橋より上に印の杭の候ふ見分せられよと云ふ。内藏允心得候ふとてゆくの、内藏允は近頃取り立てられて出頭の者なり有儀だけの武者振見よとさしやき合ひて居たり。内藏允馬より下りて川岸を行くを城中より鐵砲を打かくる。水に響きて殊に烈しく聞ゆれども、内藏允ちつとも騒がず足數をかぞへて歸り、いかにも各々たちの申され分の通り申し上ぐべしとて御旗本へ歸りけるとぞ。後雷大照と兩人に御仕置仰せ付けられしに大膳は遠に劣りてけり。願ひ申す品有つて大膳に云達しければ、事能く濟むべきやうに答へられども、興國院様の御

前にては十分に事の驛を得申し述べず。又内蔵允に云ひ違すれば内蔵充色をかへ左様なる事且那へ申さるゝ物にあらず、拙者は得取次第と荒らかに申し切つて、御前に参りては事の子細を申し上げ御聞入れなき時は然しく御せり合を申し、是非とも願の如く埒を明けて後其の人を呼びよせ、中々御聞き入れあるべき事にてはなげれども申し上げれば、御上の御慈悲にて御聞届ありたるぞと申し聞付けるとなり。そのみならず度々御前へ御諫を申し上げ争せ申す事幾度といふ事なし。後には是れを聞き傳へて内蔵允御爲を思ふ事大膳が及ぶべきに非ずと賞美しけるとかや。されば是を以て案ずるに、大膳が搦現様の御前にて命を棄てて申し開き致せしは一旦の事にて仕能き事なるべし。國の仕置は極めて大事の物なれば、大膳が一旦の骨折とはくらぶべくもなき内蔵允が忠なるべし。

七 飯田角兵衛其主肥後守を諫めし事
井新太郎様備後守様へ御教訓の事

文祿年中朝鮮より虎を引き來る。鐵の鎖をつけ兩方より七八人取り付きて引きけり。朝鮮先陣の諸大將たち名古屋に歸り集られし時、彼の虎を大力の男あまたひきはり、どつと云ひてかけ出でならび

居られし中へ通りけるに人々皆驚き騒ぎ立たる處に、加藤主計頭正隆立直し拳を振り臂を張てきつと睨まれしに、虎はしばし踏留りて清正をのみて通りけり。加藤左馬助明は初より壁にもたれかゝりて居眠りてありしが、虎の通りつる後に、暫く有りて目を開き何事に騒がれ候や虎を牽き通れる故かと閑に言れしとぞ。主計頭の子肥後守は犬に之に劣れる人なり。或夜近習の士と物諧して我は大力になりたく思ふなり、重き具足二領打ち置れ着て軍に出でなば、鐵砲の恐しき事有るべからずと云はれしを、飯田角兵衛は父の時より奉公して度々武勇の働有りける老功の者なりしが之れを聞き進み出て、先殿君は御具足一領にて志津鐵七本槍の武功より幾度となき軍に御出でなされ候へども終に滯手も負はせ給はず、朝鮮國に攻め入りて鬼將軍と異國の人も恐れ奉り候ひき。誠に死生は天命にて御座候ふ。用心の分別にては憂る事にてなく候ふ。但しよく戦へば生き悪しく戦へば死すると申す古語の候ふ。國中の百姓を随分いたはり家中の士能心服し奉りなつき従ふ時は、疊の上にて軍の勝負の道理明かに分かり候故、軍の場に至り候うても千萬の人数手足をつかふが如くになり候ふ。されば御家中の士の著なす具足は、皆大將の御一身に打ち重ね召され候ふと同じ事にて御座候ふ。もし御家中の士心に離れ候ひなば、假令百領千領の具足を召し候ふとも何の御用に立ち申すべく候ふや、敵か

しき御一言に候ふといひて退出しけるが、先殿には何とてあれまてには先を候ふにやとて聲を上げ
て泣泣出でけるとぞ。其の後感懐懐せせられけり。近頃にも新太郎様の仰せに取り傳へたる大兼平何
の用にか立つべき。家中の士の力を残らず用に立てさせなんには向ふ敵はあるまじ。大名の身にて力
一腰を頼みにせんに口惜しき事の至極なりと、備後守權に御戒め有りしも、飯田と同じ理にこそ。

八 松前伊豆守用意の事

松前伊豆守元祿年中京都町奉行勤められし時、海保友竹といふ齋師参りて、紅梅のよく開きたるを
生け置かれしを見て、御所前代并びにこなた様ならではかやうの初花見申さずと申しけるに、伊豆守
とかくの返答なく落涙せられけり。友竹いかなる故にやと案じ居たるに、やうあつて能くこそいはれ
たれ、誠に左様なるべし。我等不肖の身にてかゝる値き役職を仰せ蒙り威勢あるを知らず、うかうか
と心付かざるは大きな油断なり。是れに付けても大事の役ぞと思へば、氣遣はしく落涙したるぞと
いはれしとなり。假初の一言にもかゝ心を付けられしは古の君子の道なるべし。されば此の人の仁
徳京都にて後までも申し傳へけりぞとぞ。

九 古の名將學問和歌を嗜まれし事 井酒和田喜六器量の事

本田持賢上杉の家老なり。鷹野に出でて雨にあひ首魁の家に入りて養をかし候へとまはれ
しに、若き女物は荷ともいはずして山吹の花一枝折りて出しければ、花をくれよといふことにてはな
しとて腹立てて歸られしは、是を聞きし其の、それは、
毛重六重花はさげども山吹のみひとつだになきぞかなしき
とていふ古歌の心は、
是程の事をさへ知らず首魁の娘に劣れる事口惜しとて、其れより書をよみ歌に志をよせられけり。
井酒國へ筆を出す時田涯の海邊に山の上より岩目なほりたり、潮港へたらば通り難かるべし如何とい
ひし時、折節夜半なるに、持賢いさ見て來らんとて馬を繋り出しけるが、其意取り傳はすたりと軍
をば通されけり。これば、
遠くなり近くなるみゆの道半傳なく音に潮の音干をぞしる
とよめる歌あり。それと思ひ出して千鳥の聲遠く聞えたらば潮の干たるを知りたるとなり。又櫻口に

利根川を渡す時、暁も夜半にてくらきはくらしいつこが淺瀬なるべきと口をいひけるに、持寶

そこのひなき瀬やはさわく山川のあきき瀬にこそあだ波はたて

とよめる歌あり。波のあちき所渡せと下知して難なく淺瀬を渡りけり。されば昔より武將は必ず學問に心をよせ歌の道を知り給ひけり。奥州の合戦に入幡太郎義家、安部貞任・宗任を攻めて衣川の城に追つ詰め給ひし時、きたなくも後を見する敵物いはんとて、

衣のたてはほころびにけり、

と云ひかけ給ひしに、貞任しころを傾けて、

年をへし絲のみだれの苦しさに、

と付けたれば、入幡殿すけたる箭をさしはづし給ひけるとぞ。かゝる烈しき所にてかくつけけることいふにやさしき事なるべし。

斯くて入幡殿上京の後、宇治の關白殿に参りて軍物語ありけるを、中納言匡房卿聞きて、器量はかしこけれども軍の道は知らずとつぶやかれるを、入幡殿の耶等聞きてにくき事を申され候ふと入幡殿に申せしかば、入幡殿子細有るべしとて、民房の中納言車に乗られる所へ参りて命釋有つて、つが

て弟子になりて學問し給ひけり。

永保の合戦に入幡殿金澤の城を攻めらるる時、一行の雁の洲田の面におりんとしけるが、俄に驚き飛び亂れけるを入幡殿御覽じて馬をひかへて、中納言殿に學問しけるに、兵法に鳥起る者は伏なりといふ事あり、定めて伏兵あるべしとて、野の三方を取り巻かれしかば、案の如く三百餘の伏兵居たりしを攻め破られけり。入幡殿學問に心をよせ給はずばなきが斯る事を知り給ふべき。右大將頼朝卿和歌に心を寄せ給ひ、近き年信玄・謙信兩人とも詩歌を好み給へり。蒲生飛騨守氏郷は伊勢の松崎十二萬石より奥州會津百萬石を太閤に拜領あり、奥州を切り討めたる無雙の猛將なりけれども、極めて和歌をすき給へり。氏郷の家に佐々木の燈といへる名高き燈ありけるを細川越中守所望ありけるに、家來共是れは名物にて候ふ。別の似よりたる燈進せられよと申ししかば、

なき名ぞと人にはいひてやみなまし心のとばはいかがたへん

といへる歌の心の聴かしきとて、彼の燈を贈られけるとなり。元弘の亂に菊池寂阿入道が後醍醐天皇の救命にて、敵の城に寄せける時、備田の宮の前にて馬のすくみたりしに、

ものものの上箭のかぶらひと筋におもふ心は神ぞ知るらん

とよみて忠義の爲に命を棄てし、昔文武の人と申すべし。大將ばかりにも非ず、名高き士は、昔書を讀み學問し和歌をもすき申しけり。梶原が一の谷にて、
 ものふのとりのつたたる梓弓ひきては人のかへすものかは
 とよみ、奥州を頼朝朝政めらるる時、白河の關を越え給ふに、梶原、
 秋風草葉のつゆをばばはせて君が御れば陣守もなし
 とよみけるとかや。すべて學問して名高き勇士多し。文武は三つならず。詩歌を公家の玩物と思へるは無下に口惜しき事なり。近頃大徳院殿、文武の聞えある士を陪臣の中より十七人撰み出させ給ひしは、永井信濃守の家臣酒和田喜六殿人にて、
 芳野山花さくころの朝なりのるにかゝる峰のしら雲
 とよみける歌を聞き召し、是も又文の一事なり。喜六がすくやかなる事は内々聞し召されしとて、彼の十七人の中へ酒和田をも入れさせ玉ひけり。此の酒和田花車風流のみな心がくる人には非ず、林道春に聖賢の學問をも尋ね問ひけり。信濃守江戸の留守に家中勝手に迷惑して喜六に願ひて金銀がかり度よしを云ひけり。喜六則も信濃守にかくとも申さで、藏の銀子千貫目貸し與へければ、信濃守江

戸より來り大に腹立てて貸すとも何とて我等には云はざるや我儘に貸したる事不届なりと申されければ、喜六承り、されば其事に候ふ。只今私を御叱りなされ候ふ御志を存に候ふ故、申上げ候ふとも御聞届御座候ふまじと兼て存に候ふ、申上げ候うて御聞届無御座候ふに押して貸し申す事如何に御座候ふ。又御趣意を守り申し候うて貸し不申時は御家中大に迷惑可仕候ふ。上方の商賈町人の銀を借りて過分の利を遣はし町人に利を取らせ候うては無益の事に御座候ふ。御藏の銀子を貯へ置きしは軍用公用の爲に御座候ふ。御家中貧乏を救ひ人馬をへらさず知行高の格を勤めし候ふ事軍用の本に御座候ふ。これ公方様への御奉公と奉存候へば大むね公用に御座候ふ。且又御藏の銀を取出し候へども少しもへり申す事無御座候ふ。十年賦に申し付け候間十年の間に本の如く返辨仕候ふ。是上に少しの損もなく下には大なる益御座候うて、御家中忝しと存するは上の大益に御座候ふ故、たとへ私は咎を蒙るともと存じ申し候ふ。外に御用人は更に存せず候ふ、一人の所爲に御座候ふ間、いかやうにも罪に仰せ付けられ候へと申しければ、信濃守閉口致されけり。

一〇 武邊は律義者でありといふ事

律義なる者ならては武邊はせぬよし昔より云ひ傳へたり。加藤主計頭清正剛の者をほしく思ひ、一生の間目利に心を盡くし、人相までを稽古致されしかども其の術を得られず。唯律義者に武邊者多しといはれしとなり。又加藤左馬助嘉明も申されしには、氣さきのけなげなるものは人の目を驚かすほどの働をするといへども、踏みつめたる武功は律義なる者にあり。たとへば頼みもなく且那の威震へて人々二心を持つ中に、獨義を守りて心がほりなき強みは、律義者ならてはなき事なり。照ひ者はたとへ萬一に一旦の武邊ありても曾て頼にならず。且那の出頭を心掛け知行を取つて人に笑はるゝも恥とは己れも知れども、其の恥を恥かしとは思はぬ者は、且那を殺しても身の爲のよき事ならば爲べきなり。偽と食とは品はかかれども、落着は同じ事なりと云はれしとなり。新太郎様にも常に照ひ者に知行を興へ置くは、盜賊を抱へ置くと同じ事なりと仰せられしよし。智者の阿刺付を合はせたるが如し。

一 常憲院様越後家の訴訟御審斷の事

松平越後守水子なかりしかば、家督は實の弟永見大藏なるべしと大藏も思ひ、又家中も大かた是れ

ぞと思ひ追従しけり。小栗美作あくまで邪智あるもにて、御家督は大倉殿にてあるべしと云ふ人あれは左様にぞあらんと返答す。大藏聞き傳へて悦べり。偕て江戸へ家督の事窺ひに美作行けば、大藏も頼むとはなけれども、暇乞に事よせて念頃の體なり。美作江戸へ行き才覺を廻らして、三河守を立つべしとの議定なり。一伯配所にての子永見頼母と云ふ。其の子を三河守といへり。永見大倉は頼母が弟なり。是れも配所にて生まれたるとなり。是れより大藏大に本意を失ひ、家中日頃大倉へ取り入つたる面々もあきれたり。然れども上意と披露する上はせん方なし。美作は大藏を欺きたりと獨笑して、三河守をとり立て、權威を大に振はんと思へり。大藏堪へ兼ねてかれて入魂の面々徒驚して、美作を打ち果さんと、萩田主馬など張本たり。美作素知らぬ振して取り合はず。さては美作は越後守の妹婿なれば、子の大六は越後守の姪なり。一門の如く家中の士敬ふべしと云はせけり。これより家中騒動して、終には江戸へ訴へ數年決定せざりしに、常憲院様御代始め御自身双方の公事を御城殿中にて聞し召し御決斷ありて、越後高田二十五萬石召し上げられ、美作死罪仰せ付けられ、子の大六は曹源寺様へ御預け、天和元年六月廿二日御座敷弓場の東作庭にて是れも死罪に仰せ付けらる。永見大藏・萩田主馬は八丈島へ流罪、其の外死罪・流罪に仰せ付けられたる士數多あり。此の取り扱ひに付き渡

邊大隅守八文島へ流罪。松平大和守閉門仰せ付けられ、翌年二月閉門御免姫路十五萬石召し上げられ、豊後日出にて五萬石下され、松平上野介廣瀬二萬石の内一萬石召し上げられ、酒井雅樂守・久世大和守、御老中職召し放されけり。是皆越後守暗弱にて、威を家老用人に奪はれ欺かれし故なり。常陸院様の英斷、異國唐の玄宗を太平の天子と申し、に比ぶべしと、其節より諸國畏れ服したりけると也。

一二 土倉市正中村忠左衛門を勧めし事

池田の御家の御家老土倉市正は四郎兵衛が養子にて、實は瀧川左近將監一益の先手の士大将岩田小左衛門なり。新太郎様御使者に、誰れか可然と御吟味遊ばされ未だ決定せず。市正に御尋ねなされ候へば、市正承り中村忠左衛門可然奉存候ふ。忠左衛門事私共に對し毛頭も詔ふ心のなき男にて御座候ふ。斯の如くなる者に仰せ付けられずして、誰か外に御座有るべきと譽め立てければ、新太郎様御機嫌大かたならず、忠左衛門に使番を仰せ付けられけり。日頃市正と忠左衛門とは大に不和なり。御前にての様子を忠左衛門に語り聞かせし人ありければ、忠左衛門日頃の不和を少し後悔の氣色あり。又此の由を市正に語りける人ありければ、市正御尋によりて能き人を申し上げ給ふ事は御國の爲なり。

毛頭も私の 慮 なきことなり。不和は元の通りの不和にてこそあれ。忠左衛門は吾が心知らずといはれしとなり。これをぞ家老の職分を失はぬ人と申すべし。君々たり臣々たりといふ事誠なるかな。

一三 毛利元就大内義隆に諫言の事并熊澤助右衛門格言の事

大内義隆は周防・長門、豊前不殘領國にて安穩に石見も領地なり。太宰太貳を兼ねたる故筑前も下に從へり。周防の山口に居城して、その比並ひなき大名なりければ、漸々武備に怠り、道山を築じ、茶の會に日を暮し、家中國中の難儀を露も知らず。仕置は家老の陶尾張守晴賢に任せられしかば、尾張守三心を持ちきざして、毛利元就是れを察し、或夜密に義隆の前に出で、古より國を奪ひ候ふ事皆其の家の家老にて候ふ。それ故明君はよく家來を引きまほし、威を家老に奪はれず候ふ。威を家老に奪はれ候うては、役義を云ひ付け知行をやり候うても、其の主君よりの下知を存せず。家老より取計らひ申すと心得候ふ故、其の主君はあれども無きが知くにて、家老役人の勢次第に強くなつて、後には其の主君を殺し國をも奪ひ候ふ。今の様子危く候ふ間、御心を付けられ候へと申し給ひしかども、義隆合點なく、遂に尾張守に殺され給ひけり。案するに是れば亂國の世の事にて、太平の時

は君を殺し奉る事はなれども、主君をだまして其の威を奪ひ取るに家老用人の常の事なり。されば熊澤助右衛門と號す。新太郎様の御時執政たりしが、常に人に語りて、やがて今の大名は家老用人にだまされ、我が國は皆家老用人の物と成るを知らず。下の敬ふを能き事としてだますといふ事少しも知らず、下の情露ばかりも心付なく、何十萬石の身上にても、國を持ちたるにては有るべからずと語られしよし。智者の詞何かは違ふべき。思ひ當れる世と成りぬるぞ悲しき。

一四 稻葉一徹文學に依りて死を免れし事

稻葉伊豫守一徹織田信長に従ひけれども、信長心解けず數寄屋にて茶を賜はり、其の席にて刺し殺すべしとて巧なり。一徹數寄屋に入る時、相伴の三人挨拶に掛物の繪の讀み給へといふ。是れは韓退之の詩にて、雲横秦嶺一家何在。雪擁藍關一馬不_レ前。といふ句なり。一徹少し學問ありて讀みけるに、相伴其の故を問ふ。一徹あらあら子細を咄しければ、信長壁越に是れを聞き、つと走り出て一徹には死勝負ばかりする勇士と思ひしに、今聞く處文學にも達せり、奇特の事感ずる餘りに實を語るべし。今日のもてなしは茶の湯にあらず。其の方を刺し殺さんとせし巧みなり。相伴の三人皆懐

劍を差したり。今日より我れに永く従ひて謀を致されよ。ゆめゆめ害心を止めたりといはれければ、三人の相伴懐より小脇差を取り出だす。一徹平伏して死罪を御免下され候ふ事添く候ふ。私も内々今日殺さるべきにて候はんと察し申し候へば、腔方なく是非一人相手を取り申すべしと存じ用意仕り候ふとて、是れも懐劍を取り出して信長に見せ申しければ、信長いよいよ其の心がけを察められけり。

一五 中院内府幼き宮に後見の事 井本多佐渡守謀計の事

青蓮院の宮にや、幼き宮方に中院前内府通茂公御後見たりしに、或時將茶盤のあるを見て、家司坊官を呼びて、何とてかやうのはしたなき物を置きたるぞ。はしたなき業は本よりあしければ、譬ひ有りても御年ゆきての後は、御心付けて止む事も有るものなり。是等はさして悪事にあらずれども、此の事になれ空しく月日を過し、御學問の御志怠るものなればあしきものなりと云はれけり。誠内府公の詞尤も至極たるべきなり。又或時其の宮へ出入する者尺八の名高きを御目にかけたり。大事の器とて折紙など付けたり。かゝる所へ内府公御入り有りて、是れは誰が業ぞ、かやうのもの御目にか

ある事やあると云ふまゝに、柱に打ちあて、砕かれけり。其の後尺八の主参りけるに、其の曲を聞り聞かせ返す返す寶物打ち砕かれける事氣の毒なりと、坊官など云ひしに、尺八の主少しも苦しからず。唯私を持ちたるを内府公の聞し召されん事恐しく候ふ。お聞きなきは私の都合なりと申しけるとぞ。其の子道射卿も殿なる人にておはしけり。人の後見にはかゝる人をつけ度き事なり。豊臣秀頼に權現様御對面の後、本多佐渡守正信を召して、秀頼はかし、とき人なり。申々人の下知を受くべき人に非ず。父太閤の跡を継ぎなんと驚き給ひて意ありけり。正信承りいや私ばかり事にて秀頼卿を愚になし申さん事、いと安き事に御座候ふと申して退出しけり。

秀頼卿の御臺所は、將軍様の御姫にておはしましければ、佐渡守御臺所の上臈女房に對面し、すべて上下共に女は嫉妬をあしき事の至極とせり。秀頼卿は日本の主にて御座候へば、御召仕の女房大勢なくて叶はざる事なり。何とぞして秀頼卿の御男子御誕生にて、豊臣家の御血脈御相續あるやうに願ふ所なれば、必ず美人を選み出だしあまた御傍に置かれ、もし嫉妬する人あらば女とはいはせじ。我等科になし行ふべしと同じく云ひ合めけり。又秀頼卿の近習の面々は選びては御賢く御座なれ候ふ事大御所疎の外悦に御座候ふ。常々猿樂を御慰になされ、少々の間、御油断なく御かゝり御

座候ふやうに有りたく候ふ。御養生第一の事に御座候ふ。只今御年若きうち、何かと御心勞の事の有りては、靈症を御頼ひなされ候ふ。此の段氣の毒千萬に御座候ふ。ゆめゆめ御仕置の事に御心をかけさせられぬやう候。とかく猿樂の節舞にて御養生第一に然るべきよし、身になりがほに大切らしく云ひなしければ、皆尤もと聞き請けて、秀頼卿色に耽り猿樂を好み給ひ、仕置の事毛頭も知り給はず。流てや下の情は夢だにも合點無くあへなく終に滅亡し、蘆山矢倉にて自害し給ひ、日本の主を失ひ申されし事、本多正信の計なるべし。秀頼卿にも中院内府公の如き人後見たりせば、本多の計も徒となるべし。此の事は今太平の世なれば、敵國より大名を愚にすべきには非れども、今の大名は皆家老を初めて重き用人の爲に愚に成り給へる事ぞかし。其の子細は主君下の情を知り能く人を用ひ給へば、己れが慈なる事なり難き故、いかにもして主君を愚にせさせ給へと、明暮の心の中に願ふ事利便同じためしにぞある。此所だに大名の辨へ知し召されんには、人にたまされ給ふ事あるべからず。

一六 名將たち質素にして下情に達せられし事

井伊掃部頭兼大阪冬陣に物見入二をやる。雨に濡れて歸りければ、櫛子を開きて後、則ち着られし

小袖二つを脱ぎて兩人にやられけり。さて安藤帯刀次へ小袖をもらひに遣はし、我等かやうの事にて着るもの二つながら家來に遣はし、着替無之候ふとて、帯刀の贈られし小袖を着、革袴にて、構現様の御前へも度々出でられけるとぞ。今の世を以て見れば、三十萬石の身體にて着替のなかりしといふは、あまりなる事と不審する人もあれども、大様其の頃のありさま此の如くなりしなり。構現様大阪夏の御陣に、御旅所御用意の事仰せ出だされしに、膳米五升・干鯛一枚・味噌・鯉節にて事足るべし。味噌も多く持たすなと上意有之候ふ由。か様になれば武備は曾て以てはか行き難き事なるべし。掃部頭かやうに質素なりけれども、彦根は湖上より船にて都にゆくに便よかりしかば、太平の後は彦根の士ども大に驕り、風俗あしく衣服美麗になりしを、掃部頭儉約にかへすべき道を積り、江戸より歸る時、木綿の衣服を供の士の敷はご用意し、彦根へ到着の朝俄にくばり與へて着せられけり。彦根の家申且那を待ち受けて着かざりて迎に出でけるに、供の士一同に木綿なりしかば、不審する所へ、且那掃部頭いかにもよこれたる木綿の衣を着られ、駕籠の戸を開き、それぞれに言葉かけらるゝを見、己が身を顧みて、りつばの衣服引きさきたき心地して、それより人質素に成りけりとぞ。國清院は村々庄屋に高一石に付米二升宛免るし候へとて、年號月日堀甚五兵衛殿と御自筆に遊ばされたる

を、今其の家に持ち傳へたり。百萬石の御身の上にて、かく有りけん事、怪しきほどの事なれども、是れは戦國の時とも申すべし。新太郎様この竹を裁みて杭にせよ。何村の種米はかやうにせよ。何の役はかやうにせよと云ふ類、御自筆に遊ばされたる御書、予が曾祖父に下されたる數十通、箱一つに有りて傳へたり。今はかやうの事は郡代も知らざる體なり、衰へたる世のありさまにこそ。太平久しく亂を忘れて人々油斷し、暖なる儘に士の風俗以外の外になりて、明暮酒もり茶の會に無益の費をし、川遊・物語に日を送りて、禮義の方には心をも付けず、馬具・武具いかに成りたらんとも知らず、多く町人の家に質を遣はし、物語するなきけば、女色の戯れ言のみにて、士の道はつゆ語り出だしもせず、又儉約に事よせて利欲に耽り、あらぬむさき事をしても恥とも思はず、親族朋友の難儀を救ふ心もなく、大の物を借りて返す事を忘るゝ類口惜しき世のありさまなり。但し此の事は士の上ばかりにも非ず、すべて天下の人を四つにわかれて、士農工商とする事は、古より定りたる事なり。其の重き士をあまた持ち給ふを大名となす事なれば、天下の貴人は大名にてぞおはします。然るに今の大名貧乏にさしつたり、買ひたる物の價をやらす、國中の士民の艱難を救はず、四民の中の第一の下劣の町人を頼み、金銀をかり、それにて漸々取り續き給ふこと口惜しき事の至極なり。天下の貴人として

天下の賤しき町人に手をさげて、彼等が料簡によりて、やうやうに身體を持たせ給ふといふ事はあ
るべき。されども世のならはしとなりたれば、是れを恥とも思はずおはします。そなたでけれ。つく
づく思慮おはしませば、大名の恥辱此の上やあるべき。されば古より質素を能き事に、吝をあしき事
とするは故ある事ならずや。

一七 威恩を以て國を治められし事

新太郎様常々御意なされ候ふには、家中國中を能く治めんとならば威と恩との二つなるべし。威な
くして恩ばかりなれば、あまやかしたる子の教訓を聞かぬ如くにて用に立つべからず。又威許りにて
嚴しきを第一とせば、上むきに納得するとも眞實はなつきたるに非れば、是れ又散々の事なり。恩に
て能くなづき、法度の少しも崩れざる如くに賞罰を行ふを威といふべし。恩信なければ威も無用事
なり。威なければ恩信も用に立たず。然れども畢竟の所は能く下の情を知り、事大事なり。下の情を知
らざれば恩信も威も用に立つまじきぞ。兎にも角にも聖賢の教を稽古なくては、此の一事は知りがな
しと仰せありきとなり。

一八 佐藤五郎左衛門咄の事

前橋の城主酒井雅樂頭藤原佐藤五郎左衛門直方を、殊の外崇敬にて、客人のあしちひなりき。或時五
郎左衛門井伊掃部頭のもとに招請せられ、未だ掃部頭對面し給はざるうち、家老用人物語しける時、
五郎左衛門申しけるは、大事と申すものは勿論少しのわざにても傳授稽古と申すこと御座候うて、師
匠に便りて習ひ受け、其の上を工夫を盡くして、やうやうと合點するものにて候ふに、日本にては至
極大切の事に傳授もなく稽古もなく、自己の分別にて埒を明け候ふこと有之候ふ。各邊御存じに候ふ
哉といふ。家老もいや皆々存ぜず候ふ、如何と問ひければ、其の時五郎左衛門されば其の事にて候
ふ、一國の仕置にて候ふ。數萬の士民の一命にかゝり候ふ大事にて安危の至極にて候ふ。夫れ故異國
にては聖人賢人の教へおかれ候ふ詞萬世の鏡に成り候ふ道を稽古いたし候ふに、今の君臣ともに此の
稽古なく、自己の分別にて埒を明けられ候ふは、さてもさても危き事の至極に候ふと語りけり。

右雨夜燈一卷。備藩湯常山先生所述也。臣嘗借諸案崎君脩氏。謄寫。以爲家珍焉。今命筆工。寫取一本。以備樓閣公子之覽。仰希公子且夕誦之。有以助爲人君盛天職之志。云爾。
明和八年辛卯秋九月八日

目 赤松 國 恐惶謹啟

新訂 常山紀談 下卷終

明治四十五年四月二十日印刷
明治四十五年四月廿五日發行

學生文庫第廿九編



常山紀談下編
定價金三十錢

校訂者 大町桂月

發行者 加島虎吉
東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

印刷者 波邊爲藏
東京市京橋區日吉町十番地

發兌
東京市日本橋區本石町三丁目
東京市日本橋區住吉町二番地
電話本局三六六番二一六七番
振替貯金口座東京一七四四番
電話浪花一九四九番
振替口座東京一九八四二番
至誠堂書店
至誠堂小賣部

大町桂月先生訂校題

學 生 文 庫

(全五十卷)

(逐次刊行)

本美頗 錢拾三金冊各價定 製特珍袖

校訂 嚴密

內容 豐富

——{目書刊既}——

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|----------|----------|---------|---------|-----------|---------|---------|-----------|-----------|----------|----------|---------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|----------|
| 1 南朝史傳全 | 2 日本外史全 | 3 益軒十訓上編 | 4 謠曲全集上編 | 5 曾我物語全 | 6 西遊記上編 | 7 源平盛衰記壹編 | 8 太平記壹編 | 9 心學道話全 | 10 常山紀談上編 | 11 日本外史中編 | 12 益軒十訓全 | 13 先哲叢談全 | 14 義經記全 | 15 一休諸國物語全 | 16 常山紀談中編 | 17 益軒十訓下編 | 18 源平盛衰記貳編 | 19 謠曲全集下編 | 20 西遊記下編 |
|---------|---------|----------|----------|---------|---------|-----------|---------|---------|-----------|-----------|----------|----------|---------|------------|-----------|-----------|------------|-----------|----------|

學生及讀書家一般の讀物として史傳、修養、
教訓、文藝、隨筆等の古典的名著を網羅す

大町桂月先生自ら全卷を選擇し
解題し校訂して多趣多益也

印刷 鮮明

品與賞良最の校學各

裝幀 優良

大町桂月先生訂校題

學 生 文 庫

(全五十卷)

(逐次發刊)

本美頗 錢拾三金冊各價定 製特珍袖

選擇 至善

解題 卓拔

——{目書刊既}——

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|---------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|-----------|------------|------|---------|-------|---------|--------|--------|--------|-------|--------|---------|
| 21 百人一首一夕話全 | 22 狂言記全 | 23 太閤記壹編 | 24 大岡政談上編 | 25 日本外史下編 | 26 續心學道話全 | 27 禪學名著集全 | 28 四書全 | 29 常山紀談下編 | 30 源平盛衰記三編 | 近刊書目 | 武士道名著集全 | 太平記二編 | 保元平治物語全 | 平家物語上編 | 川柳名句集全 | 謠曲全集下編 | 太閤記貳編 | 大岡政談下編 | 源平盛衰記四編 |
|-------------|---------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|-----------|------------|------|---------|-------|---------|--------|--------|--------|-------|--------|---------|

周到卓拔なる批評的解題は
各書の性質綱要價値を詳説す

何人も一本を藏すべき
先哲名著の一大寶庫

價格 至廉

携帶 至便

は節の文注初め續取上以部五
候仕可に引割一に特

新譯漢文叢書第一編 大町桂月先生譯評

○新譯 日本外史

本書は近世の偉人絶代の文章家山陽が一生の心血の凝る所識見卓抜筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかにかに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敘事詩なり現代の文章家大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くて永遠に復活すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇抜痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む觀殊に奇一讀人をして血躍り胸鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自ら寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編 友田宜剛先生評解

○新譯 文章軌範

◎東京朝日新聞評、文章軌範を普通の日本語に譯し(本文悉くゴシック五號活字を用ふ)更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文の構造法を説明し上欄に原漢文を掲げたり文章軌範評解の書として最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範は明治の日本語を習ふものゝ研究書となれり著者は文章教授上に一見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと云ふ可し

袖珍天金箱入特製 紙數 壹千壹百頁 正價金壹圓拾錢 小包料金 八錢

新譯漢文叢書第三編

濱野三郎先生註解

新譯 孟子附索引

全四十卷縮刷 全八冊 紙數 拾九百 正價金 九拾錢 郵稅 八錢

文章は奔放自由を極め英氣の潑洩たる比喩の巧妙なる實に不朽の天品世界の大文學書内容亦實に豊富に孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり其の和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇抜なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一の位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切のもの

大町桂月先生譯評

全壹冊 紙數三百五十頁

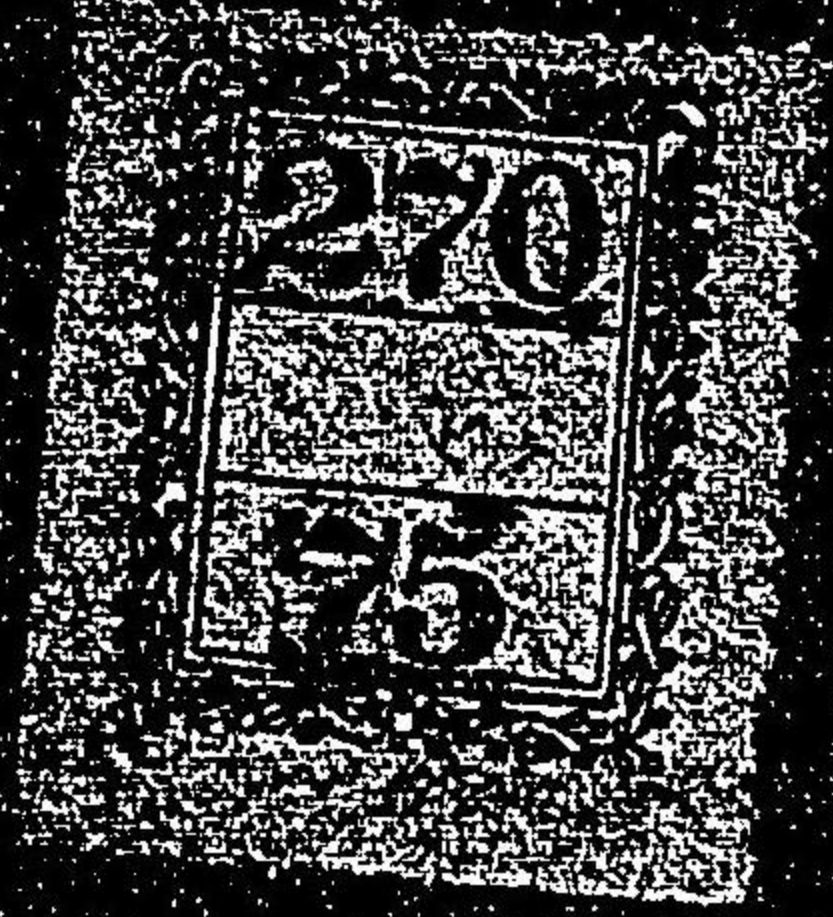
新譯 日本樂府

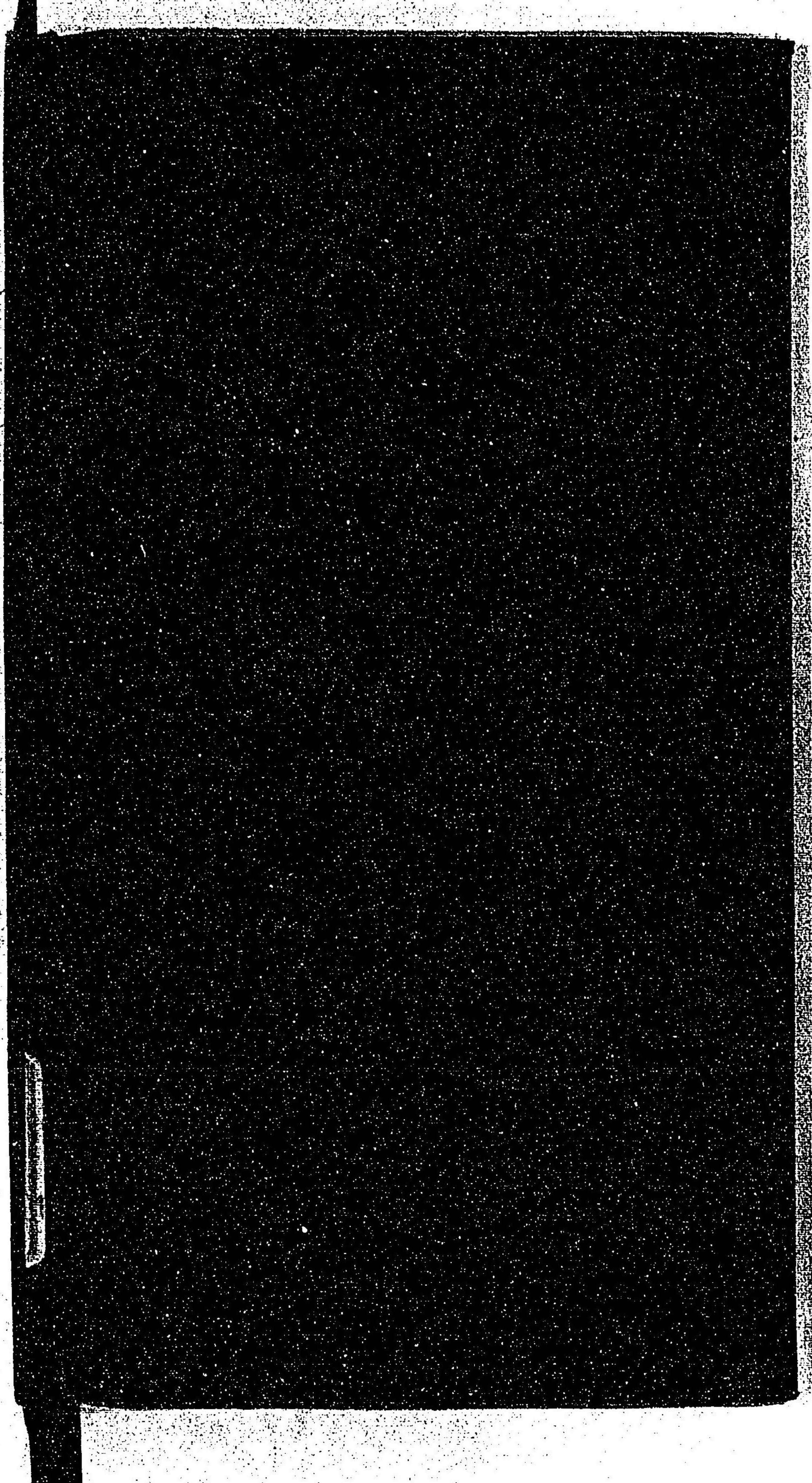
袖珍總クローズ 正價金五拾錢 天金箱入特製 郵稅金 六錢

新譯漢文叢書第四編

山陽獨得の歴史詩尊王の愛國の精神活躍す!

當代に異彩を放つ大町桂月先生蓄き日本外史を譯され今たま山陽の詠史日本樂府を譯するのみならず之を釋し之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを揮動せしむ以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん





004553-003-7

特63-601

常山紀談

大町 桂月/校

下

M44-45

ACE-1151



